

J.LEAGUE IMPACT REPORT 2025

Jリーグインパクトレポート2025

サステナビリティ活動に
関する報告書



イントロダクション

野々村 芳和 チェアマンメッセージ

I

Jリーグが目指す世界観

1. Jリーグが考えるサステナビリティ

II

ミッション実現のための歩み

1. 2025シーズンにおけるJリーグの活動
2. テーマ実現のためのロードマップ
3. 日本財団とサステナビリティ領域における連携協定の締結

III

3つのテーマの取り組みと共創事例

2025シーズンの活動サマリ

1 気候アクション

気候アクションの基盤づくり

- ロードマップ
- Jリーグサステナビリティ事業活性化プロジェクト
- Sport Positive Leaguesへの参画

Jリーグの取り組み

- JリーグのCO₂排出量（2025年度）
- SPLにおける12の評価指標
- クラブの気候アクションを支えるハンドブック
- 環境教育教材オリジナル短編アニメ「FUTURE KID TAKARA」への協賛
- Jリーグ気候アクションアンバサダー制度
- Jリーグ環境教育授業
- Jリーグ気候アクション月間
- 「Sport Positive Summit 2025」でJリーグ初登壇
- <特別コラム> 欧州先進クラブ視察レポート
- 第2回 サステナビリティカンファレンスの開催
- Jリーグとパートナー企業の活動事例

Jクラブの取り組み

- Jクラブの活動事例

ホームタウン活動調査

2026年Jリーグチャレン！アウォーズ受賞活動

2025シーズンの振り返りと今後の展望

サステナビリティ担当執行役員 辻井 隆之 メッセージ

2 インクルーシブな社会へ

- ロードマップ
- 目的別クラブの取り組み状況
- 多様な観戦方法
- Jリーグとパートナー企業の活動事例
- Jクラブの活動事例

3 地域コミュニティの醸成

- ロードマップ
- Jリーグとパートナー企業の活動事例
- Jクラブの活動事例



Jリーグがつなぐ 持続可能な未来へ

Jリーグは1993年の開幕以来、地域と一体となったクラブづくりを方針に掲げ、地域社会と連携しホームタウン活動を推進してまいりました。2018年には「Jリーグをつかおう!」を合言葉に、3者以上で共通の社会課題を解決する連携のための枠組み「シャレン!」を始動。アイデアに満ちた共創モデルが次々と誕生しています。

そうした中、近年は非常に激しい雨や台風により試合が中止になるなど、Jリーグが目指す「安心安全な運営」自体に危機感を持たざるを得ない環境変化を踏まえ、Jリーグは2021年に環境省と連携協定を締結し、2023年にサステナビリティ部を新設しました。2030年までにCO₂排出量を初年度比で50%削減する目標を掲げ、全公式試合のスタジアム排出量の可視化、電力由来のCO₂排出実質ゼロでの試合開催、地域の再生可能エネルギーの普及、環境教育等といった気候アクションにも注力しています。

2026年、Jリーグは世界基準に合わせたシーズン移行という大きな節目を迎え、国際競争力を高めながら持続的な発展を目指します。同時に、地域に根差した気候

アクションをさらに深化させ、スポーツを取り巻く環境を持続可能な形で次世代へとつないでいきたいと考えています。

私たちは現在、これらをスポーツ界の内外へよりインパクトを伴って広く伝え届けるため、リーグと全60クラブの取り組みをとりまとめ、活動領域をPLANET（気候アクション）、PEOPLE（インクルーシブな社会へ）、COMMUNITY（地域コミュニティの醸成）の3つのテーマに整理し、「Jリーグのサステナビリティ」として再定義しました。各テーマごとにロードマップを策定し、全ての活動の成果をこれらのロードマップ上で位置づけ報告します。

本レポートは、これまでの活動とその成果を可視化し、社会に対してより効果的に伝えることを目指しています。今後も、地域の人々と連携し、多くのステークホルダーを巻き込みながら、Jリーグとして目指す方向性を共有し、社会全体の持続性を高めていく、その一助になれば幸いです。



I

Jリーグが目指す世界観

1. フットボールの土台となる活力ある社会と健全な地球環境

Jリーグは、プロスポーツを運営するとともに、豊かなスポーツ文化の醸成を実現することを理念に掲げ、多くの人々が気軽にスポーツを楽しめるように、クラブは地域スポーツの振興活動を積極的に行っています。

また、その土台である活力ある社会と健全な地球環境をつくることにも地域と連携して取り組んでいます。

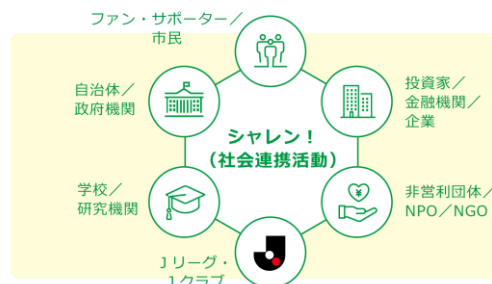
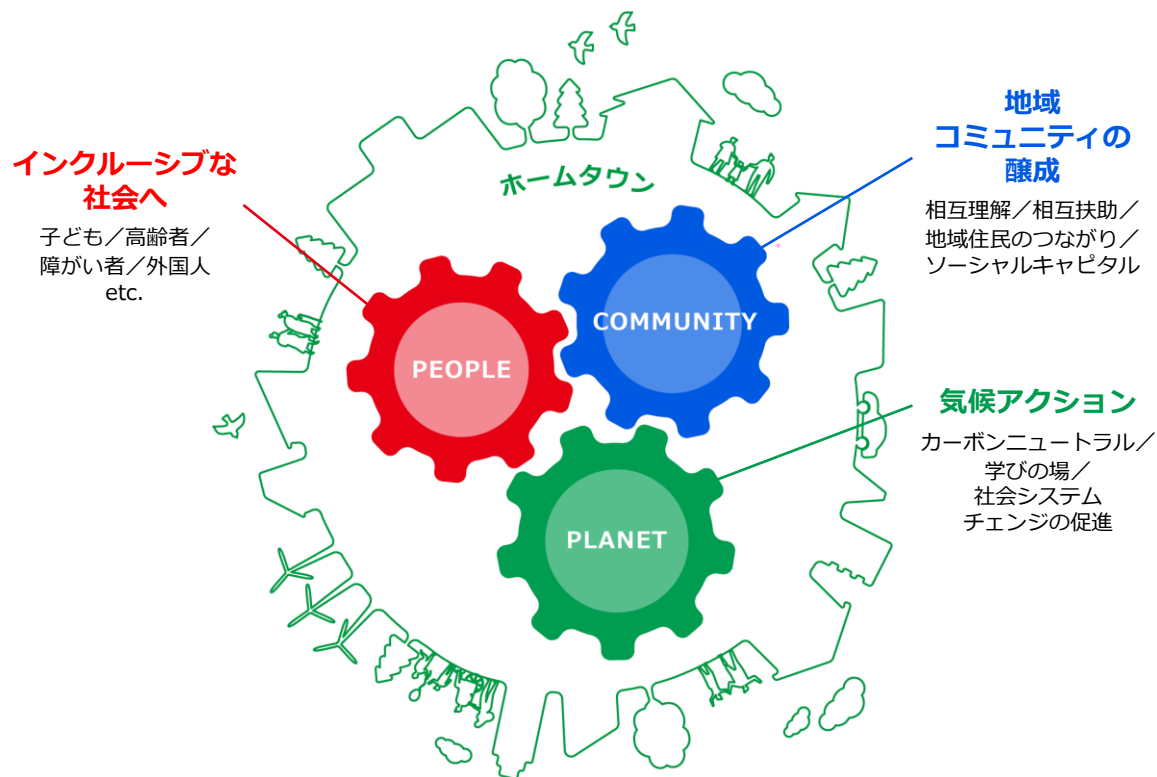


2. Jリーグのサステナビリティ～3つのテーマ～

Jリーグは2024年、サステナビリティ領域での取り組みを「気候アクション（PLANET）」、「インクルーシブな社会へ（PEOPLE）」、「地域コミュニティの醸成（COMMUNITY）」という3つのテーマで再整理し、Jリーグ全60クラブで地域の多様なステークホルダーと共に社会課題を解決していくことを目指しています。

この3つのテーマは、それぞれが相互に関係しており、それぞれの領域で活動を進めることにより、相互に好循環を生み出し、高めていくことができると考えています。

Jクラブにおいて重要なホームタウンという場所を中心に、これまで同様シャレン！という手法も最大限活用しながら、Jリーグ全体でサステナビリティ活動を推進していきます。



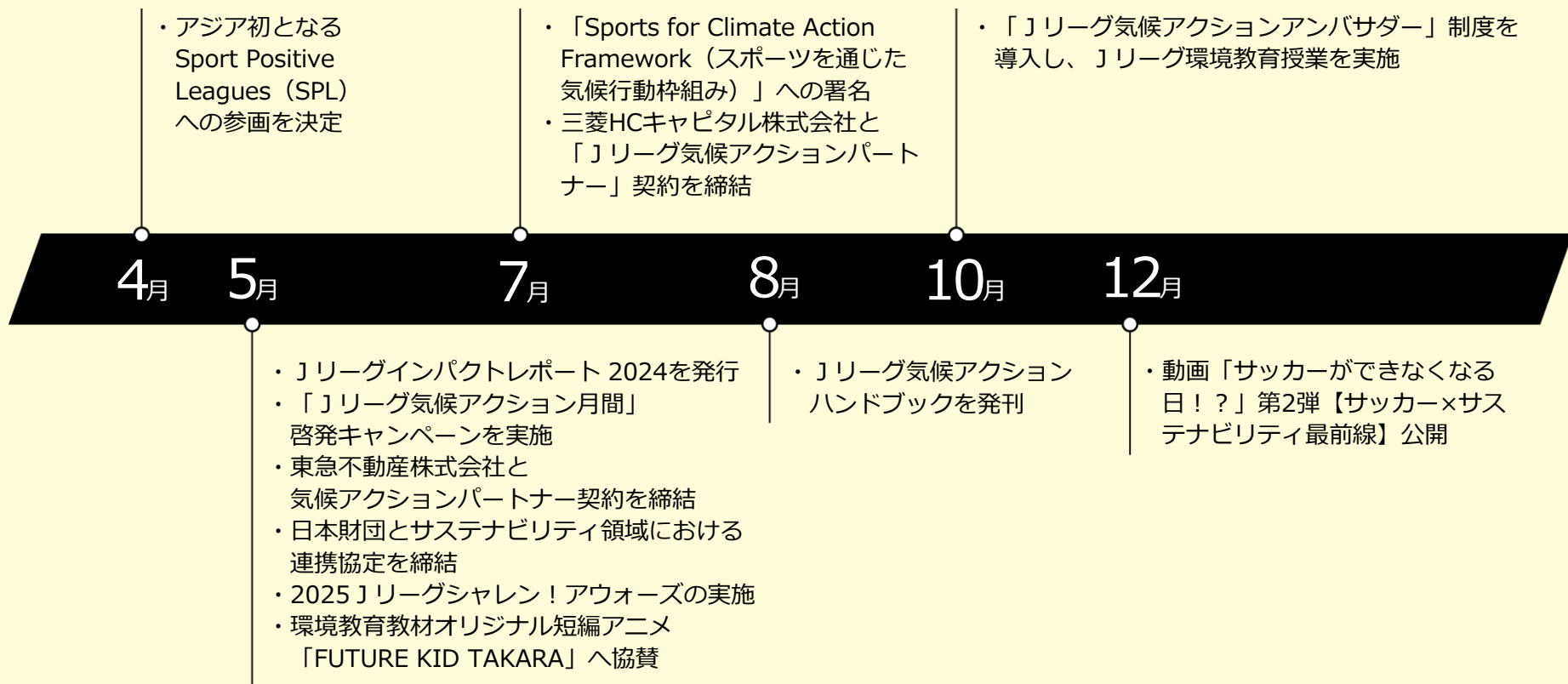
シャレン！（社会連携活動）とは？

社会課題や共通のテーマ（教育、ダイバーシティ、まちづくり、健康、世代間交流など）に、地域の人・企業や団体（営利・非営利問わず）・自治体・学校などとJリーグ・Jクラブが連携して、取り組む活動です。

II

ミッション実現のための歩み

1. 2025シーズンにおけるJリーグの活動



以下、Jリーグパートナー各社との取り組みはシーズン通し継続実施

- ・ **Be supporters !**（2020年～サントリーウエルネス株式会社）
- ・ **ソナエルJapan杯**（2021年～LINEヤフー株式会社 ※旧ヤフー株式会社）
- ・ **TH!NK THE BALL PROJECT**（2023年～NTTグループ）
- ・ **チャレン！で献血**（2023年～明治安田生命保険相互会社）
- ・ **Jリーグ×小野伸二スマイルフットボールツアー for a Sustainable Future supported by 明治安田**（2024年～明治安田生命保険相互会社、アディダス ジャパン株式会社／株式会社モルテン／日本航空株式会社／ヤマザキビスケット株式会社／花王株式会社／株式会社フルッタフルッタ）
- ・ **Jリーグ環境教育授業**（2025年～東急不動産株式会社 ※一部の授業を共同実施）

2. テーマ実現のためのロードマップ



サッカーファミリーとは：日本サッカー協会（JFA）において、サッカーに関わる全ての人々を「サッカーファミリー」と定義しています。

【参照】ドキュメント | JFA | 日本サッカー協会

3. 日本財団とサステナビリティ領域における連携協定の締結

2025年5月9日、Jリーグと日本財団は、日本のスポーツ界におけるサステナビリティへの取り組みの機運を高めるため、「サステナビリティ領域における連携協定」を締結。2025年においては、第一ステップとして「PLANET／気候アクション」を推進すべく、2025年の財団助成金総額3.7億円を活用し事業を推進してきました。

●連携協定の目的

日本財団の「海洋」「国際」「子ども」「災害」「障がい」「社会」などの活動領域と、Jリーグがサステナビリティ推進事業として進める「気候アクション」「インクルーシブ社会の実現」「地域コミュニティの醸成」という3つのテーマが重なる領域について、継続的に連携していくこと



4. Jリーグにおけるサステナビリティ戦略の形成と展開プロセス

2023年にJリーグは、これまでの社会連携活動「シャレン！」を引き継ぐ「社会連携グループ」と気候変動問題に取り組む「気候アクショングループ」を併せ持つ「サステナビリティ部」を新設。部門新設当時より、「社会価値共創活動の推進」に関する知見を有するKPMGコンサルティング株式会社のサポートを得て施策を推進しています。全体の目指すべき方向性を策定し、

取り組みのインパクトを発信するツールとして「インパクトレポート」を発行しました。「気候アクション」では自らが出しているネガティブなインパクトを最小化するために、CO₂排出量算定のガイドラインの策定・運用を進めてきました。そして2025年には、2026特別シーズンからの参画を目指しSport Positive LeaguesのJリーグにおける制度設計・運用を共に進めています。



2025

発信と制度設計を本格化したステップ

Jリーグ初となるインパクトレポートを作成。Jリーグ版 SPL指標の策定や、国内での運用フローを整備。CO₂排出量算定では、Scope3の排出量算定ガイドラインを策定。

実行フェーズへさらなる前進

2回目となる本インパクトレポートを制作。SPLに参画し、評価もいよいよ実施段階へ。CO₂排出量算定では、Scope1,2排出量の公表（P17）

2024

CO₂排出量算定の準備と取り組み状況の可視化

Scope1,2の排出量算定に向けたガイドラインづくり、Jクラブの気候アクション調査を実施し、各クラブの取り組み状況を整理。これらの取り組みを通じて、SPL参画に向けた基礎づくりを推進。

現在

2024

2025

2023

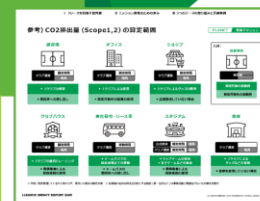
サステナビリティ戦略の礎を築いた一年

サステナビリティの3つのテーマ（Planet・People・Community）を整理し、ロードマップを策定。

2023



気候アクションのロードマップ



CO₂排出量（Scope1,2）の算定範囲



III

3つのテーマの取り組みと 共創事例

① 気候アクション

② インクルーシブな社会へ

③ 地域コミュニティの醸成

気候アクションの基盤づくり

Jリーグの取り組み

Jクラブの取り組み

1. ロードマップ

PLANET

気候アクション

短期（2024-2025） → 中期（2027） → 長期（2030）



Scope1： 燃焼によって直接的に排出される温室効果ガスの量

Scope2： 供給される電気の使用に伴って排出される温室効果ガスの量

Scope3： Scope1、Scope2以外に間接的に排出される温室効果ガスの量

Jリーグでは、大規模な自然破壊や環境負荷を生じさせないことを前提とし、地域の文化・環境／生態系・経済を考慮した再生可能エネルギーを活用・推進します。

2. サステナビリティ事業活性化プロジェクト

PLANET

気候アクション

2025年4月、本プロジェクトを発足し、**JリーグとJクラブのサステナビリティ事業を戦略的かつ効果的に推進するためのプラットフォームを作り、活動を後押しすることを目的**として取り組みを進めています。

本プロジェクトでは、日本財団の新たな助成制度を活用し、各クラブの取り組みを資金面から支える仕組みを整えながら、リーグとクラブが一体となった気候アクションの推進を図ります。

8つの重点施策

1 Sport Positive Leaguesへの参画

2 活動助成金制度の創設と配分

3 Jリーグ気候アクションハンドブックの作成、配布

4 ロードマップ策定支援
(実行委員向けワークショップ)
教育プログラムの実施
(主管試合における子ども向けワークショップ)

5 気候アクション動画の制作と発信

6 インパクトレポートの作成と情報発信

7 欧州視察

8 ワークショップ・研修会開催

目的

- ・Jクラブが実施する気候アクションに関するロードマップ又は事業計画の策定及び実践、特にSPLで定義されている12項目に関する事業の推進を図る

対象事業

- ・Jクラブが実施する気候アクションであり、SPLの評価に沿った事業

対象活動領域

- ・原則として自クラブのホームタウン

対象期間

- ・第1回 2025年4月1日から2026年3月15日
- ・第2回 2026年4月1日から2027年3月15日
- ・第3回以降は2026年のSPLのランキングに応じた傾斜配分を予定

第1回の助成総額

- ・2億4千万円（1クラブの申請上限額400万円）
※日本財団の助成制度を活用

Jリーグサステナビリティ事業活性化プロジェクトは、日本財団の助成を受けています



3. 助成金事業の全体像

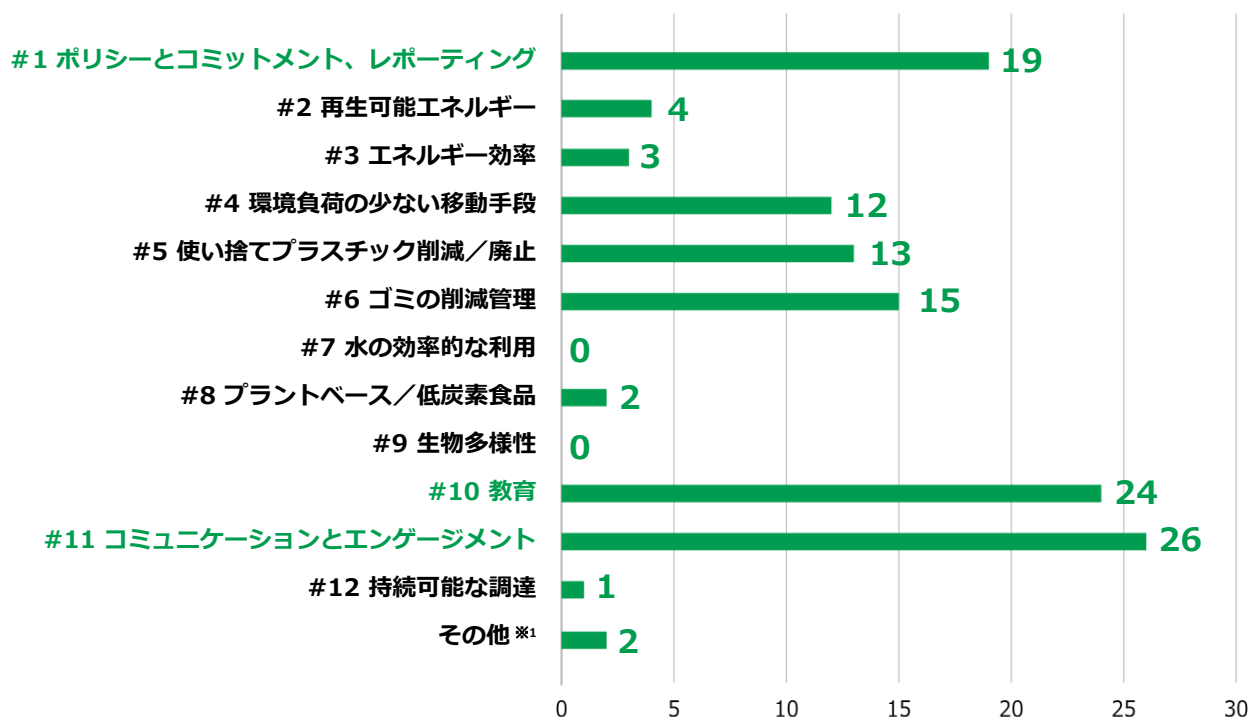
PLANET

気候アクション

クラブより申請のあった全121件の事業のうち、「#1 ポリシーとコミットメント、レポーティング」、「#10 教育」、「#11 コミュニケーションとエンゲージメント」の上位3テーマが全体の約6割弱を占める結果となりました。また、事業全体の約7割が新規の取り組みであり、本助成金が各クラブにおける新たな取り組みを後押ししました。



[テーマ別の助成金事業]



新規取り組み※2数

85件

総取り組み数

121件

||

新規
取り組み率

70%

※1: 「その他」は、複数のテーマに属する活動をまとめて申請しているものを表します

※2: 新規取り組みとは、これまでクラブとして実施したことがない取り組みのことを指します

4. Sport Positive Leagues への参画

PLANET

気候アクション

2025年4月22日、Jリーグは気候アクションの一環として、国際的イニシアチブ「Sport Positive Leagues (スポーツポジティブリーグ、略称 SPL)」への参画を決定しました。2025年現在、イングランド・プレミアリーグをはじめ欧州4つのプロサッカーリーグが参画しており、Jリーグは5番目、アジアでは初の参画となります。



● Jリーグ版SPLの参画目的と概要

参画目的

優れた取り組みを共有し、**60クラブが相互に学び合いながら気候アクションを前進**させ、その進捗や成果を効果的に社会へ発信していくため

評価対象

Jリーグ全60クラブを
クラブ単位で評価

初期評価期間

2026年1月～6月の活動

評価の仕組み

SPLの評価基準に基づき、各クラブの環境サステナビリティに関する取り組みを12の領域で整理・評価し、クラブの現在地と進捗を可視化します

評価結果の活用

各クラブの改善促進および好事例の共有を通じ、リーグ全体の方向性整理に活用
なお、ランキングについては全体の上位20クラブを公表予定です

SPL（日本版）の導入においては、日本財団の助成を受けています



III

3つのテーマの取り組みと 共創事例

① 気候アクション

② インクルーシブな社会へ

③ 地域コミュニティの醸成

気候アクションの基盤づくり

Jリーグの取り組み

Jクラブの取り組み

1. JリーグのCO₂排出量（Scope1,2）

PLANET

気候アクション

Jリーグは、2025年からScope1,2排出量の算定を開始しました。算定にあたっては、KPMGコンサルティング株式会社と連携し、全てのクラブが統一した基準で算定・開示・削減に取り組むことができるよう、Jリーグとしての排出量算定ガイドラインを作成し、各クラブへ展開しました。

Jリーグ+全60クラブ
Scope1,2排出量合計

19,141 2025年実績
t-CO₂

● 2025年度（2025年1月～12月）の算定結果

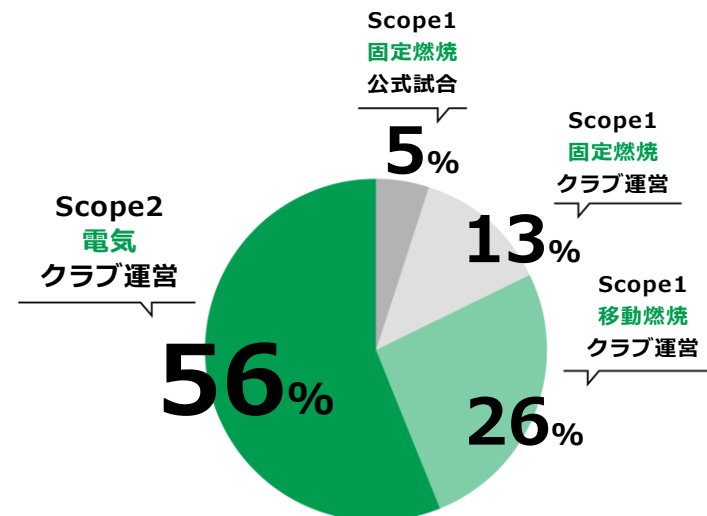
Scope		活動	排出量 (t-CO2)
Scope1 自社による 燃料の燃焼	固定燃焼 施設の給湯、暖房の燃料使用など	公式試合	946
		クラブ運営	2,534
	移動燃焼 社用車のガソリン、軽油使用など	クラブ運営	4,938
Scope2 他社から 供給された 電気の使用	電気 施設の空調、照明、 コンセントの電気使用など	公式試合	0 (2,916)
		クラブ運営	10,723 (14,897)
合計			19,141

※ クラブ運営とは公式試合を除く、全てのScope1,2に該当する活動を指す

※ 排出量はマーケット基準(電力メニュー別の排出係数、証書反映後)で算定。カッコ内はロケーション基準(全国平均の排出係数)また、施設を賃借または部分使用のため、データ把握が困難な場合は推計

- 「公式試合」の電力については、**パートナー各社と連携し2023年から実質再エネ化**しており、排出量は0としています。(⇒P32)
- 「クラブ運営」については、排出量の56%が電気使用、26%が社用車のガソリン・軽油使用によるものです。現在、各クラブにおいて**再エネ導入、エネルギー効率向上、低排出な移動など**排出量削減の取り組みを進めています。
- 今後、2026年度からはScope3の算定も開始します。ファン・サポーター、地域企業、自治体の皆さまとの協力をより一層深め、サッカーを起点とした社会変革を促し、脱炭素社会の実現を目指します。

● 排出量の内訳

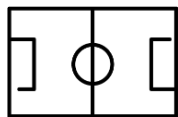


参考) CO₂排出量 (Scope1,2) の算出範囲

PLANET

気候アクション

練習場



クラブ運営	固定燃焼
	電気

・Jクラブの練習

・他団体への貸し出し

オフィス



クラブ運営	固定燃焼
	電気

・Jクラブによる使用

・算定対象外の組織の使用

ショップ

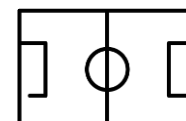


クラブ運営	固定燃焼
	電気

・Jクラブによるグッズに販売

・店舗販売していない場合

活動場所



排出源

算定対象の活動例

算定対象外の活動例

クラブハウス



クラブ運営	固定燃焼
	電気

・Jクラブの屋内トレーニング

・他事業者による併設施設の使用

自社保有・リース車



クラブ運営	移動燃焼
-------	------

・チームバスでの
試合会場までの移動

・チームバスの
他団体への貸し出し

スタジアム



公式試合	固定燃焼	電気
クラブ運営		

・トップチームの試合
・女子チームなどの試合

・他事業者による併設施設の使用

倉庫



クラブ運営	電気
-------	----

・Jクラブによる
グッズなどの保管

・倉庫を使用していない場合

※ 所有／指定管理しているかに係わらず、使用した場合は算定対象 ※ 従業員の私的利用を主目的とする施設（寮・社宅など）は事業活動と関連性がないため算定対象外

2. SPLにおける12の評価指標

PLANET

気候アクション

SPLでは、クラブの環境サステナビリティに関する取り組み評価をするため、12の評価指標を設定しています。以下では、それぞれのカテゴリーにおける具体的な評価基準の内容を示します。



SPL（日本版）の導入においては、日本財団の助成を受けています

●12の評価指標、および具体的に促進したい活動など

1  ポリシーとコミットメント、レポーティング サステナビリティ全体や環境に係る方針／戦略が含まれており、Scope1-3の排出量などの客観的な情報を定め公表していること	2  再生可能エネルギー クラブが再エネ比率40%以上を目標に取り組むこと、複数の関係者と共に継続的に連携・協業できる社会システムを構築すること	3  エネルギー効率 体系的なエネルギー効率（方針／戦略、モニタリング、外部評価実績など）を定め、取り組むこと
4  環境の少ない移動手段 環境負荷の少ない移動ポリシーを目に見える形で提唱し具体的な施策を実施していること	5  使い捨てプラスチック削減・廃止 来場者が利用する場所～スタッフ専用エリア／キッチンなどを対象に使い捨てプラスチックの除去を促し、体系的に取り組むこと	6  ゴミの削減管理 ゴミの焼却率目標を50%と設定し、「廃棄物管理／リサイクルプログラム」の導入や3R（リデュース／リユース／リサイクル）に取り組むこと
7  水の効率的な利用 水の節約・削減・再利用に関するポリシーなどを導入し、実際に水使用量の削減および再利用に取り組むこと	8  プラントベース／低炭素食品 環境の観点より持続可能性基準を満たすor客観的根拠や意図的努力を踏まえた調達を行った食品・食材での提供を実施すること	9  生物多様性 生物多様性に関する方針／戦略を有しクラブ内に限らず地域コミュニティに行き渡らせることで、自然と地域の生態系支援に取り組むこと
10  教育 全ての選手（男女、アカデミー選手など）に対して、PR目的ではなく環境の持続可能性／気候変動に関する教育プログラムを実施すること	11  コミュニケーションとエンゲージメント クラブの公式HP上にサステナビリティのWebページを設置し、ファン・サポーターの環境意識などへの行動変化に積極的に取り組むこと	12  持続可能な調達 クラブが扱う全ての物品について、環境・倫理・社会的責任などを含む「持続可能な調達方針」を定め、取り組むこと

Jリーグ気候アクションサイト SPL評価指標ページへ 

3. クラブの気候アクションを支えるハンドブック

PLANET

気候アクション

気候アクションを継続的に進めていくためには、各クラブが取り組みの意義を理解し、具体的な行動につなげていくことが重要になります。Jリーグでは、クラブが主体的に活動を広げていけるよう、「気候アクションハンドブック」を制作しました。

気候アクションハンドブックの制作は、
日本財団の助成を受けています

Supported by
日本財団
THE NIPPON
FOUNDATION

● 気候アクションハンドブックの役割

1

理解を深める

気候変動とスポーツの関係性や、クラブが取り組む意義について、専門家の意見を中心に整理しています。また、気候アクションに関連する専門用語についても解説し、取り組みを理解するための基礎情報をまとめています。

2

道筋を示す

SPLのカテゴリーごとに、取り組みの考え方を整理した上で、4～5のステップに分けて段階的に進めていく手引き書の構成としています。クラブがそれぞれの状況に応じて、取り組みを検討しやすい道筋を示しています。

3

取り組みを広げるヒントを提示する

国内外のサッカークラブの取り組みを中心に、他スポーツの事例も交えながら、活動を広げていくためのヒントを紹介しています。また、自治体や企業との連携や、補助金・支援制度の活用につながる情報も整理しています。



Jリーグ気候アクションハンドブック 

4. 環境教育教材オリジナル短編アニメ 「FUTURE KID TAKARA」への協賛

PLANET

気候アクション

Jリーグは、気候アクションの一環として、環境教育教材としてのオリジナル短編アニメーション・シリーズ「FUTURE KID TAKARA」の企画趣旨に賛同し、シリーズ（全11話）のうち第6話に協賛および制作協力を行いました。



© Beyond C. / Future Kid Takara製作委員会

■ 環境教育教材ショートアニメ「FUTURE KID TAKARA」（全11話）

NHKエンタープライズと世界的なアニメーションスタジオのSTUDIO4℃がタッグを組み制作しました。作品内には人気声優の梶裕貴氏や吉田帆乃華氏、戸田恵子氏らが出演し、環境教育教材として全国の学校現場や「Jリーグ環境教育授業」にて活用されています。

[「FUTURE KID TAKARA」公式ホームページへ](#)

5. Jリーグ気候アクションアンバサダー制度

PLANET

気候アクション

気候アクションをより身近に、そして継続して広げていくために、Jリーグでは「気候アクションアンバサダー制度」を設けています。本制度では、**Jリーグの選手や選手OBをアンバサダーとしてJリーグが認定し、各クラブが進める気候アクションを社会へ伝えていく役割を担います。**

アンバサダーは、ホームタウンでの活動や発信の機会に関わりながら、クラブの取り組みを地域や社会につなぐ存在です。2025シーズンからは、クラブの気候アクションと連動した活動が順次展開されています。



Jリーグ気候アクションアンバサダー

※2026年2月時点

所属	氏名
Jリーグ特任理事	小野 伸二
Jリーグ特任理事	内田 篤人
北海道コンサドーレ札幌	横野 純貴
ヴァンラーレ八戸	近石 哲平
鹿島アントラーズ	遠藤 康
ベガルタ仙台	富田 晋伍
ベガルタ仙台	梁 勇基
モンテディオ山形	岡崎 建哉
福島ユナイテッドFC	田中 雄大
水戸ホーリーホック	本間 幸司
栃木SC	廣瀬 浩二
栃木SC	赤井 秀行
ザスパ群馬	清水 慶記
ジェフユナイテッド千葉	斎藤 大輔
FC東京	石川 直宏
東京ヴェルディ	深澤 大輝
東京ヴェルディ	稲見 哲行
川崎フロンターレ	森谷 賢太郎
横浜F・マリノス	金井 貢史

所属	氏名
横浜FC	内田 智也
松本山雅FC	片山 真人
ツエーゲン金沢	廣井 友信
清水エスパルス	伊東 輝悦
ジュビロ磐田	山田 大記
名古屋グランパス	阿部 翔平
京都サンガF.C.	飯田 陸斗
京都サンガF.C.	中野 瑠馬
京都サンガF.C.	永田 倖大
ガンバ大阪	加地 亮
セレッソ大阪	丸橋 祐介
FC大阪	岩本 知幸
奈良クラブ	鈴木 大誠
ガイナーレ鳥取	長谷川 アーリ アジャスール
ファジアーノ岡山	金山 隼樹
サンフレッチェ広島	森崎 浩司
レノファ山口FC	山瀬 功治
カマタマーレ讃岐	竹内 彬

所属	氏名
徳島ヴォルティス	石井 秀典
アビスパ福岡	中村 北斗
ギラヴァンツ北九州	北出 尚大
ロアッソ熊本	飯星 明良
ロアッソ熊本	小林 慶太
ロアッソ熊本	長嶋 志歩
ロアッソ熊本	根岸 恵汰
ロアッソ熊本	半代 将都
ロアッソ熊本	李 泰河
ロアッソ熊本	渡邊 怜歩
大分トリニータ	松本 怜
デゲバジャーロ宮崎	西岡 大志

計 **49** 名

Jリーグ気候アクションアンバサダー一覧 [🔗](#)

6. Jリーグ環境教育授業

PLANET

気候アクション

未来世代が安心してスポーツを楽しめる社会を守るため、Jリーグ気候アクションアンバサダー（※詳細前スライド記載）と連携し、Jリーグはホームタウンでの「Jリーグ環境教育授業」を通じた取り組みを進めています。

● 全体概要

対象	Jクラブホームタウンの小学校／高学年（推奨）
目的	気候変動の現状や原因を学び、 日常生活における身近な行動変容につなげる
実施主体	Jリーグおよび各クラブ
講師	Jリーグ気候アクションアンバサダー
授業内容	環境教育教材ショートアニメ「FUTURE KID TAKARA」（※詳細P21参照）の視聴、JリーグやJクラブの気候アクションの紹介を通じて、地球温暖化の現状や対策方法などを学び、自分たちができる温暖化対策や気候アクションに取り組む仲間を増やすための活動を考え、共有する
実施時期	2025年10月～

※一部東急不動産と共同で実施しており、詳細はP34に記載



● 2025年実施結果

実施回数 **27** 回 参加人数 **1,619** 人

参加者のコメント（一部）

もっと気候変動について
知ること、未来をかえる
ことができるかもしれない

楽しかったし
色々なことを
たくさん知れた！

少しでも学んだこと
を友達や家族に
伝えたい

7. Jリーグ気候アクション月間

PLANET

気候アクション

気候変動問題への社会的関心が高まる*環境月間である6月に、啓発キャンペーン「Jリーグ気候アクション月間～未来の地球に、いいパスを～いよいよ次の一步を踏み出します！」と題し、Jクラブが各地で行う気候アクションをわかりやすく伝えるための強化月間を実施しました。



Jリーグ気候アクション月間

～未来の地球に、いいパスを～ いよいよ次の一步を踏み出します！

目的・趣旨

全国各地でJクラブが行う多様な気候アクションを集中的に発信し、わかりやすく伝えるための強化月間

キャンペーン内容

Jクラブによる約100種類に及ぶ気候アクションの実施

JリーグおよびJクラブは、約100種類に及ぶ気候アクションに集中的に取り組む

キャンペーン特設サイトの開設

キャンペーン期間に実施されたJリーグ及びJクラブの各活動情報「Sport Positive Leagues」における12の重点項目で集約し掲載

期間中の全公式試合の配信で特別映像などを放映

配信のオープニングにて、Jリーグ公式マスコット「Jリーグキング」が気候アクションのテーマカラー「サステナブル・グリーン」へと変化した特別映像を公開。あわせて公式映像内のクロックCGに「6月」ハッシュタグ「#6月はJリーグ気候アクション月間」を掲出したほか、ハーフタイムにも気候アクションの啓発動画を放映。

*環境月間とは

6月5日は「環境の日」であり、1972年にストックホルムで開催された国連人間環境会議を記念して定められた。国連では日本の提案により、同日を「世界環境デー」としている。日本では「環境基本法」に基づき、国民や事業者の環境保全への関心と行動を促す日と位置づけられており、6月は「環境月間」として国や地方公共団体を中心に全国で環境保全に関する取り組みが実施されている。

Jリーグ気候アクション月間
特設ウェブサイトへ



8. 「Sport Positive Summit 2025」でJリーグ初登壇

PLANET

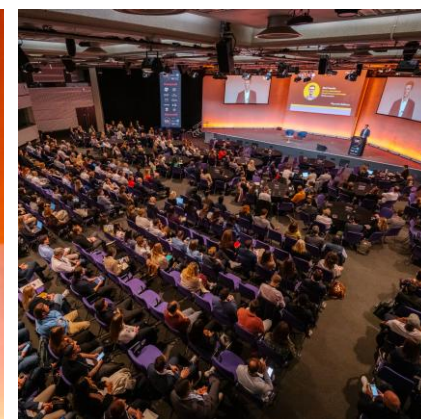
気候アクション

— 世界のスポーツ界との対話を通じた気候アクション推進の発信 —

「Sport Positive Summit」は、スポーツ界が連携し、サステナビリティ、気候変動対策、生物多様性といった課題への対応を推進することを目的とした国際会議です。本サミットは、国連気候変動枠組条約（UNFCCC）および国際オリンピック委員会（IOC）と連携して開催されており、クラブやリーグ、競技団体、スタジアム、アスリート、企業、政府機関、国際機関といった幅広い関係者が現地で 500 名以上参加し、スポーツの未来を守るための議論や知見共有が行われました。2025 年は 10 月 7 日および 8 日にイギリス・ロンドンで開催され、ヨーロッパを中心に世界各国から 500 人以上の関係者が参加しました。

同サミットには、Jリーグ サステナビリティ担当執行役員の辻井隆行がパネリストの一人として登壇しました。登壇では、Jリーグが推進する気候アクションの考え方や各クラブの取り組み状況を紹介するとともに、Sport Positive Leaguesへの参画に向けた準備状況とその意義について発信しました。

また、地域と連携しながらクラブ主体で環境課題に取り組むJリーグの特徴的な推進モデルについても紹介。本サミットへの参加を通じて、Jリーグの取り組みを国際社会へ発信するとともに、世界のスポーツ界と連携を深める契機となりました。



©Sport Positive Summit / Capturise

●サミットでの主な学び

“Progress Over Perfection”

— 完璧さを目指すのではなく、
前進を積み重ねることの重要性 —

本サミットへの参加を通じ、環境対応においては、最初から完璧な取り組みを求めるのではなく、現状を可視化し、継続的に改善を積み重ねていくことが重要であるという考え方を改めて認識しました。

【特別コラム】欧州先進クラブの視察から得た知見 — 視察レポート —

PLANET

気候アクション

2025年10月、Jリーグおよび複数クラブのスタッフ、Jリーグ特任理事の小野伸二さんとともに、欧州クラブを訪問し、サステナビリティの先進的な実践を学びました。



欧州先進クラブの視察は、
日本財団の助成を受けています

トッテナム・ホットスパーFC

トッテナムでは、スタジアム運営の各領域に環境配慮が組み込まれている点が印象的でした。スタジアムでは**プラントベースや低炭素食品の提供、リユースカップ導入、LED照明の全面採用に加え、スタジアム内でビールを醸造することで輸送に伴うCO2排出を削減する取り組み**も行われています。

今後は再生可能エネルギーによる自家発電率向上を重要プロジェクトとして位置づけており、担当者からは「**サッカーの影響力は非常に大きく、環境を守ることはサッカーそのものを守る**こと」との言葉もあり、競技の未来と環境対応が直結しているという認識が共有されていました。

ブリストル・シティFC

ブリストル・シティでは、来場者の移動やスタジアム運営を通じて環境負荷を減らす取り組みが継続的に進められていました。試合日には**3つのルートでシャトルバスを運行し、利用者は8年で約3倍に増加**。利用促進のため、バス利用者へのプレゼント配布なども実施。また、自転車来場者には試合中の無料メンテナンスを提供するなど、公共交通や自転車利用を後押し

する仕組みが整えられています。さらに、試合日に残った食品を**スタジアムから1マイル圏内の施設へ寄付する仕組み**も構築されており、「**私たちの変化は小さな一部に過ぎないが、スポーツには社会に変化をもたらす力がある**」という担当者の言葉の通り、地域と共に取り組みが継続されていました。

僕自身は経営的な立場の経験がないので、これが正しいかどうか分からないですけど、他の国・他のクラブができて、日本でできないことはないと思っています。日本という**のは組織としてまとまった時の力強さ、これは日本が一番絶対強い**と思っている。

日本だってやろうと思ったらできることもあるんじゃないかなと。僕自身も責任を持って、知ることから伝えることに変えていきたいと感じています。



Jリーグ特任理事 小野伸二さん

リヴァプールFC

リヴァプールでは、サステナビリティ戦略「The Red Way」を基盤に、環境対応をクラブ全体の方針として体系的に推進しています。近年は海洋保全にも重点を置き、**選手が出演するコンテンツ制作などを通じてメッセージ発信を強化**しています。施設面ではサポーターの協力によりリサイクル率を25%から96%へ向上

させたほか、トレーニングセンターでは**果樹園や菜園を整備し、収穫物を選手やスタッフが活用**するなど、生物多様性への取り組みも進められていました。「**あらゆる分野で先頭に立つことが目標**」という姿勢のもと、競技面と同様に環境分野でも継続的な施策が展開されています。

フォレストグリーン・ローヴァーズFC

フォレストグリーン・ローヴァーズでは、クラブ運営そのものを環境方針に基づいて徹底的に設計しています。**スタジアムで提供される食事は全てヴィーガン料理とし、ユニフォームには竹素材を使用、電力は再生可能エネルギーで賄う**など運営全体で環境負荷低減が図られています。

世界で唯一カーボンニュートラルと認められた**フットボールクラブ**とされています。さらに**ピッチ管理でも化学薬品を使用せず、有機肥料や雨水を活用**するなど独自の手法が導入されています。「**サステナビリティは何かを諦めることではない**」という考えのもと、さまざまな活動が続けられていました。

こうした取り組みにより、クラブは**国連から**



視察を通じて、欧州クラブでは**環境対応を特別な施策ではなく、日常のクラブ運営に上手く組み込んで推進**しており、**小さな実践を積み重ねることが、継続的な変化へと繋がっていく**ことを学びました。

サッカーができなくなる日!? 第2弾 | 小野伸二が現地取材
【サッカー×サステナビリティ最前線】 - YouTube



9. 第2回 サステナビリティカンファレンスの開催 1/2

PLANET

気候アクション

2026年1月28日、Jリーグは SPL参画を踏まえ、スポーツ界における気候アクションの具体化を後押しするための場として、2024年に続き2回目となるサステナビリティカンファレンス2026を実施しました。

●実施概要

開催日時	2026年1月28日(水) 12:00~16:30
場所	国際連合大学 (UNU) ウ・タント国際会議場
開催方式	会場+オンラインライブ配信のハイブリッド
後援	国際連合広報センター
協力	Sport Positive、ブリストル・シティFC
内容	JリーグにおけるSPL評価基準の発表、SPL創設者とブリストル・シティFC講演など

●カンファレンスの要点まとめ

- ・ SPL評価基準の具体内容を公開し、参加者が行動を検討する出発点を整備
- ・ 欧州クラブの実践事例を紹介し、取り組みを具体的にイメージできる材料を提供
- ・ スポーツ団体・企業・自治体など多様な関係者が参集し、連携を前提とした議論と意見交換を実施



Supported by
日本財団
THE NIPPON
FOUNDATION

サステナビリティカンファレンスは日本財団の助成を受けています

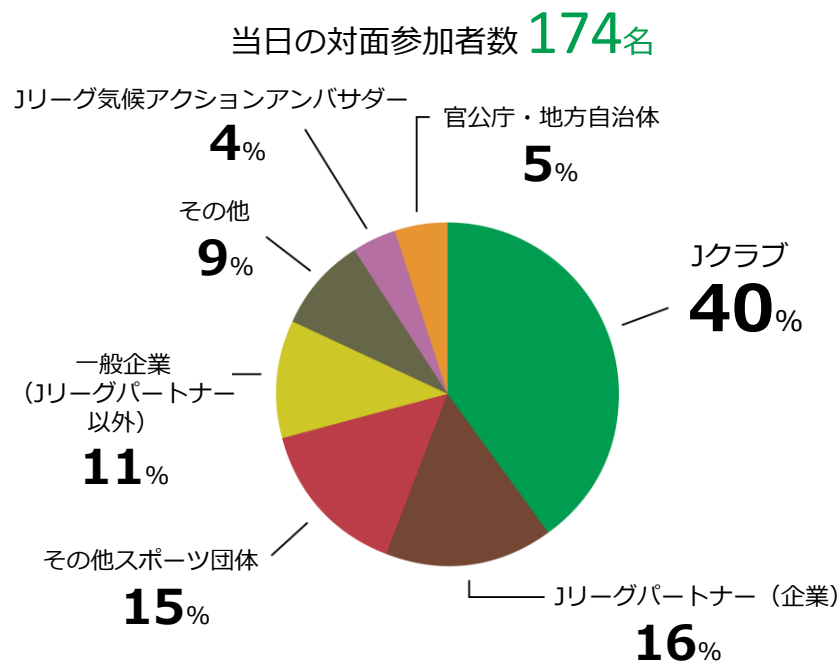
9. 第2回 サステナビリティカンファレンスの開催 2/2

PLANET

気候アクション

※事後アンケート結果

参加者数および属性



Jクラブ以外の参加者が約60%を占め、多様なステークホルダーが集まったことで、気候アクションが“Jクラブ単独の取り組み”ではなく、“社会横断のテーマ”へと広がっていくことが期待される。

主要成果

満足度
95%
N = 106

Q.

カンファレンスに対する満足度について。

※5段階TOP2

「非常に満足した」「満足した」

意識変容
(重要な課題と認識して
実行する意向)

87%
N = 69
(Jクラブ&スポーツ団体)

Q.

参加後の行動変容として、サステナビリティ推進（気候変動対策）に対して最も近いものをお選びください。

※4段階TOP2

「非常に重要な課題として実行していく（経営上の最優先課題とする）」
「重要な課題として実行していく（経営上の重要な課題とする）」

10. Jリーグとパートナー企業の活動事例

PLANET

気候アクション

● 明治安田×Jリーグの森～未来をつむぐ森～

2023年より開始した、全国各地のクラブと連携しながら森林の再生・保全活動を行い参加者の環境意識を醸成していく取り組み。人々の暮らしを支え、豊かな恵みをもたらす日本の森林を未来世代につないでいく。

※今後も複数地域で実施をしていく予定

実施結果



森林整備、自然観察や
クラフトなどのイベント



植樹イベント

実施
回数 **1**回
/4回

実施
回数 **1**回
/2回

イベント
参加人数 **68**人
/298人

イベント
参加人数 **168**人
/282人

植樹
本数 **471**本
/871本

開催地：岐阜県

* 神奈川県でのイベントは荒天のため中止(127名参加予定)
[2025年度実績/2023年～2025年累計]

開催地：山梨県

[2025年度実績/2023年～2025年累計]



過去累計
CO₂吸収量*
(年間)

約7.7t

* CO₂吸収量：林野庁が公表するスギ人工林(36～40年生)のCO₂吸収量(約8.8t-CO₂/ha・年、約1,000本/ha)を基準に試算

| ステークホルダー関係図・役割



10. Jリーグとパートナー企業の活動事例

PLANET

気候アクション

● THINK THE BALL PROJECT

NTTグループの持つテクノロジーを用い、ファン・サポーターが気候アクションに参加・継続しやすい仕組みづくりを2023年に開始。ファンが楽しみながら環境について意識し、それが個人の行動変容につながるような取り組み。本プロジェクトにおける主要な活動であるサステナカップ（ファン・サポーター参加型のクラブ対抗戦）は、2023年の初年度は4クラブ、2024年は15クラブで実施され、2025年には全60クラブでの実施となった。

実施インパクト

2025年
サステナカップ

投稿数

25.7 万件

参加人数

3.2 万人

サッカーリーグのファン・サポーター主導のサステナビリティ活動に1か月で参加した最多人数としてギネス世界記録™に認定。

サステナカップの
アプリ内でのアンケート調査

気候アクションに
対する

意識変化あり

95.8%

行動変化あり

66.8%

昨年からの変化

意識 1.7 % 増加

行動 13.8 % 増加

| ステークホルダー関係図・役割



©ALBIREX NIIGATA



10. Jリーグとパートナー企業の活動事例

PLANET

気候アクション

● Jリーグ×小野伸二 スマイルフットボールツアー for a Sustainable Future supported by 明治安田

Jリーグ特任理事の小野伸二さんをメイン講師に迎え、小野さんだからこそ伝えられるサッカーの楽しさや喜び、素晴らしさを感じていただくこと、サッカーを通して気候アクションの重要性を理解していただくことを目的に、小学生の子どもたちを対象とした「サッカー教室」と「サステナートーク」を2024年より実施。Jリーグ60クラブの拠点を優先し、全国47都道府県で順次開催。

実施インパクト

2025年度（2025年4月～2026年3月）

活動回数 **15回** /35回 参加人数 **4,405人** /1.03万人

※2025年度実績／2024年度・2025年度累計

参加者アンケート結果※1

イベント全体の
満足度

94.0%

イベント実施後に
“温暖化、気候変動に興味を持った”
と回答した参加者の割合

90.5%

※1 2025年度全15回の実施後、参加者を対象にアンケートを実施し、5段階評価で上位2段階の回答をした人の割合から算出

| ステークホルダー関係図・役割



● 参加した子どもからの感想

僕も将来サッカー選手になりたいと思っているので、将来のために温暖化対策をしていきたい。今日のサステナブル教室や動画で学んだことを学校のみんなにも教えてあげたいと思う。サッカーだけでなく、色々なことを学んだ1時間半だった。

● 参加した保護者からの感想

気候変動がもたらす影響がわかりやすかった。サポーターが多く、地域に根付いた「Jリーグだからできること」の内容が自分ですぐにでも出来そうなのがあり行動にうつしてみようと思った。



10. Jリーグとパートナー企業の活動事例

PLANET

気候アクション

● 電力由来のCO₂排出実質ゼロで全公式試合開催

Jリーグ全公式試合（2025年は1,219試合）で、右記パートナー各社が所有するFIT非化石証書・グリーン電力証書を活用し、会場で使用する電力を再生可能エネルギーでまかなうことで、温室効果ガス排出量をゼロにする取り組み。2023年より継続実施中。

※ただし、期間中に既に再エネ・実質再エネ電力を調達しているスタジアムにおける試合を除く

実施結果

実施試合

1,219試合

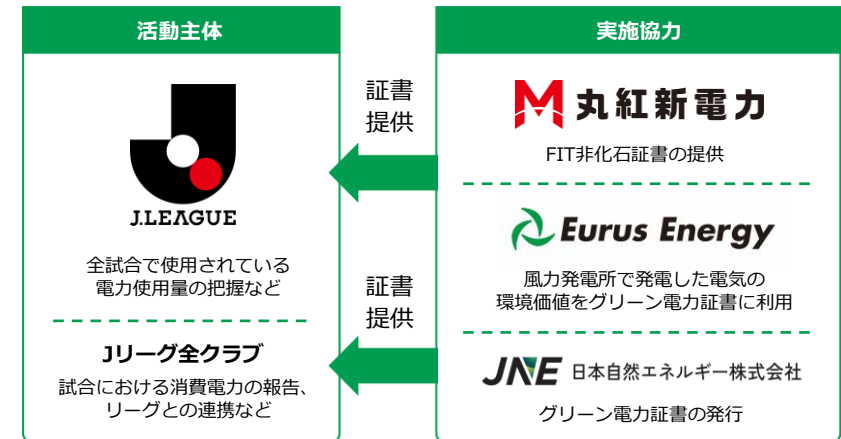
※その他Jリーグ公式イベント（2件）でも実施

2024シーズン公式試合開催に伴うScope1,2におけるCO₂排出量のうち約75%が電気由来であり、それらを全て実質再生可能エネルギーとすることで、CO₂排出量を実質ゼロにしている。

※2023-2025シーズンにおいても上記同様

CO₂削減量（年間）
約 **2,900t**

Ⅰ ステークホルダー関係図・役割



※クラブが自主的に実施した試合／Jリーグ主管試合・イベントも含む



10. Jリーグとパートナー企業の活動事例

PLANET

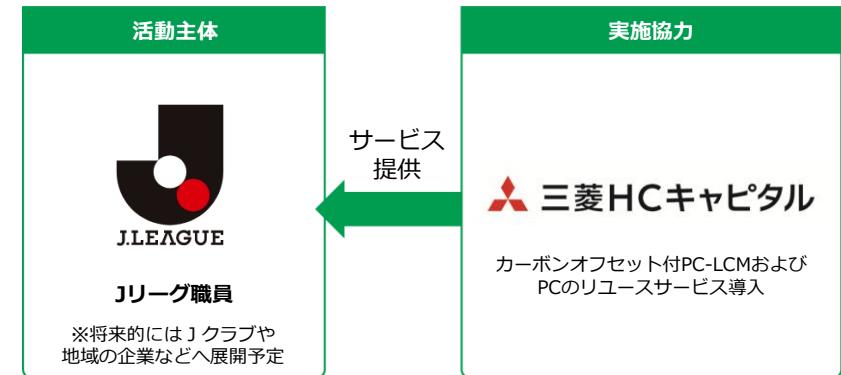
気候アクション

●カーボンオフセット付PC-LCM (Life Cycle Management) およびPCのリユースサービスを導入

2025年7月1日より三菱H Cキャピタル（以下、MHC）はJリーグ気候アクションパートナーとして、Jリーグ・Jクラブと共に気候変動対策を推進していく。



Ⅰ ステークホルダー関係図・役割



今後の取り組み概要

Step 1

サーキュラーエコノミー 基盤の構築

MHCのリユース機能を活用、Jクラブをハブとして地域内のリユースPCを買い取りし、その買い取りフィーを地域の環境保全費用としてJクラブへ還元する。さらにメーカーと連携したリファーマービッシュPC*の提供を通じてサーキュラーエコノミーモデルの構築をする。

*使用済みPCを整備・再生し、再出荷する高品質な再生パソコン

Step 2

PCライフサイクル全体での カーボンオフセット展開

カーボンオフセット付PC-LCM (Life Cycle Management) をJリーグおよびJクラブをハブとして地域の地域のパートナー企業やスポンサー企業へ展開し、AI活用の進展などにより増加するPCの電力消費に伴うCO₂排出量をオフセットする。

Step 3

地域創出 カーボנקレジット事業の構築

Jクラブが有する地域ネットワークを活用し、再生可能エネルギーや森林資源などの地域資源を基盤としたJ-クレジット*を創出する。創出された価値は地域へ還元するとともに、地域のゼロカーボン実現に貢献する。

*省エネや再エネなどによるCO₂削減・吸収量を国が「クレジット」として認証し取り引き可能にした制度。

10. Jリーグとパートナー企業の活動事例

PLANET

気候アクション

●「Jリーグ環境教育授業」をJクラブホームタウンの小学校で実施

Jリーグ気候アクションアンバサダーや東急不動産社員が講師となり、全国各地の小学年を対象に2025年秋以降に4回実施。授業では、「気候変動」をテーマに、それぞれの視点より解説を行い、参加者との意見交換や交流を通じた学びの機会を提供。環境に対する啓発活動を行いました。

[環境授業の詳細はP.23を参照](#)

実施結果

2026年3月時点

Jリーグ環境授業
(東急不動産と共同開催)

活動回数 **4回** 参加人数 **171人**



| ステークホルダー関係図・役割



未来へのキックオフ ～Jリーグと考える気候変動～

東急不動産とJリーグは、「未来へのキックオフ～Jリーグと考える気候変動～ Presented by 東急不動産」を開催した。気候変動がサッカーや社会に与える影響や、両者が「気候アクションパートナー」として推進する環境活動に関して紹介しました。

実施インパクト

2026年3月時点

総視聴・来場者数 **163人** メディア露出 **132媒体** イベント満足度 **97.0%**



イベント後に
“気候変動への理解が
深まった”と回答した
参加者の割合

97.0%

10. Jリーグとパートナー企業の活動事例

PLANET

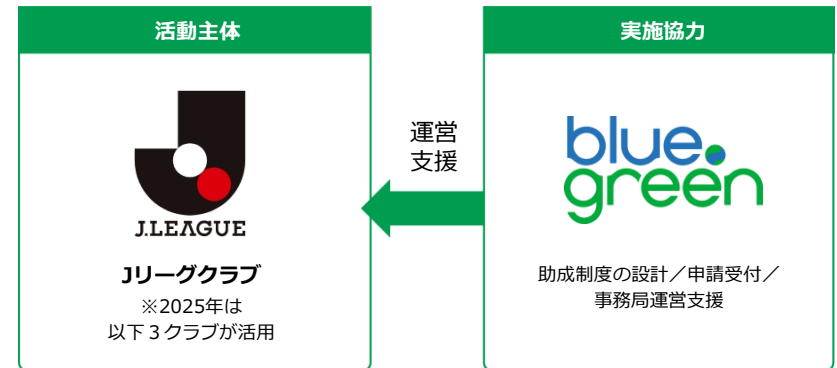
気候アクション

● Jリーグ地域再生可能エネルギー助成制度の設立

Jリーグは、2024年に地域の自然資源を活用した再生可能エネルギー普及や地域循環の促進を目的に「Jリーグ地域再生可能エネルギー助成制度」を新設。

株式会社エスプールブルードットグリーンは専門的知見を活かし本助成の設計・申請受付・事務局運営支援を行っている。2025年度には以下3クラブが制度を活用した事業を開始するなど、クラブが自治体や地域企業と連携しながら再生可能エネルギーの導入と地域の気候アクション推進を進めている。

｜ステークホルダー関係図・役割



2025年度 取り組み事例

各取り組みの詳細はP.37～39で紹介

水戸ホーリーホック

耕作放棄地を活用したソーラーシェアリングを中心としたGXプロジェクトを開始



©MITO HOLLYHOCK

「GXプロジェクト」
ソーラーシェアリング事業詳細へ

ガイナレ鳥取

ローカルエナジーと連携し耕作放棄地に営農型太陽光発電所「しばふる太陽光発電所」を設置。



提供：ローカルエナジー(株)

しばふる太陽光発電所の
事業詳細へ

鹿島アントラーズ

クラブハウスへ太陽光パネルと蓄電池を導入しエネルギーの地産地消モデルを推進。



©KASHIMA ANTLERS

地域でのエネルギー
地産地消モデル詳細へ

Jリーグ地域再生可能エネルギー助成制度

PLANET

気候アクション

Jクラブを対象とした「地域再生可能エネルギー助成」により、再生可能エネルギーの導入を促進し、地域循環と地産地消の実現を通じて、Jクラブの持続的な発展と地域共創を目指します。

Jリーグ地域再生可能エネルギー助成制度

設立背景

- 地域循環の促進による地域貢献
- 環境に配慮した再エネ推進とその意義発信

対象活動

再生可能エネルギー普及および地域内循環促進のための発電設備の新設および拡張などのプロジェクト



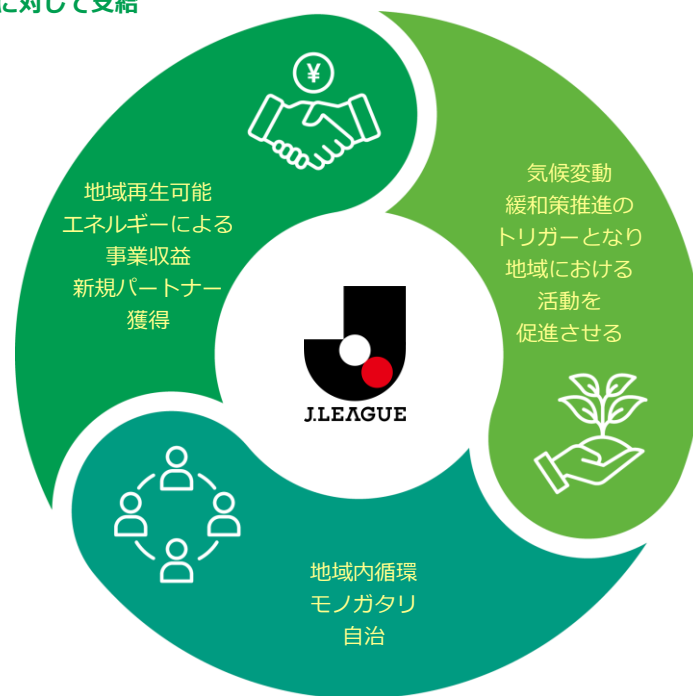
運営体制

【助成金事務局】
 (株)エスプールブルードットグリーン
 (Jリーグパートナー企業としての取り組みはP.xxを参照)

【助成金審査委員】
 櫻井 啓一郎 産業技術総合研究所 主任研究員 (安全科学研究所)
 馬上 丈司 千葉エコ・エネルギー株式会社代表取締役
 藤野 純一 公益財団法人地球環境戦略研究機関 (IGES)
 吉岡 剛 芝浦工業大学 システム理工学部環境システム学科 特任教授

助成制度総額2,000万円／年、
 1クラブ上限1,000万円
 原則として対象活動費用の
 50%に対して支給

期待される効果



「Jリーグ地域再生可能エネルギー助成制度」の詳細はこちら [🔗](#)

Jリーグ地域再生可能エネルギー助成制度:事例

PLANET

気候アクション

ガイナレ鳥取

地域新電力会社のローカルエナジー株式会社と連携し、耕作放棄地を活用した営農型太陽光発電所「しばふる太陽光発電所」を設置し、発電設備下で芝生を栽培するソーラーシェアリングの取り組みを開始した。発電した電力をローカルエナジー株式会社が、境港市の公共施設へ供給、営農はガイナレ鳥取が担い、芝を生産・販売するなど、エネルギー供給・農業・地域循環モデルの創出を地域のステークホルダーと協働して進めています。

太陽光発電協会主催2025年度「ソーラーウィーク大賞」特別賞受賞

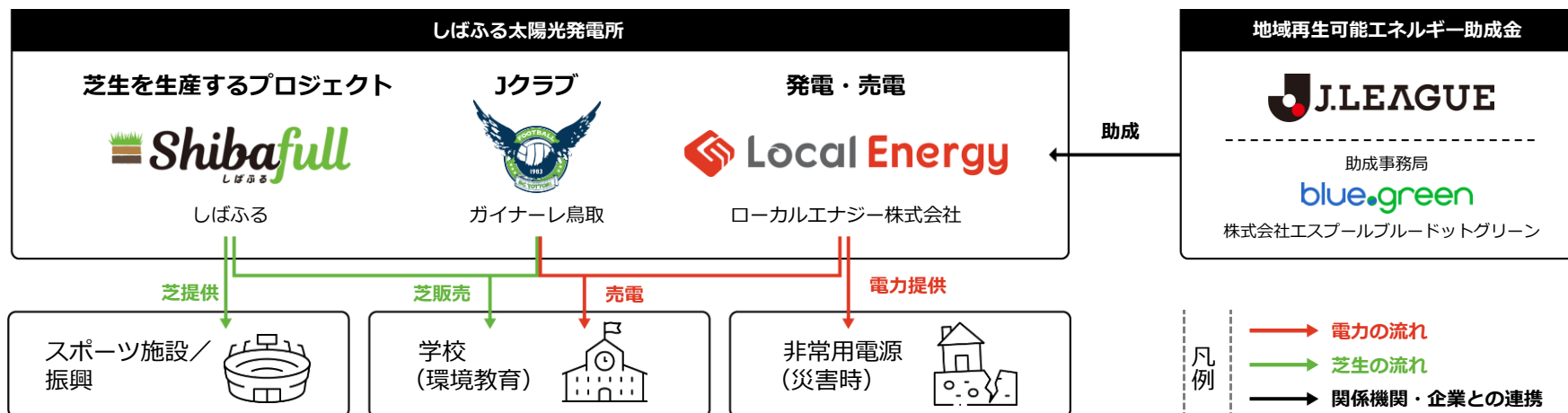
実施結果 [2025年4月～2026年3月]

発電量 約 **9.5** 万 kWh 対象農地 約 **2,726** m²



提供：ローカルエナジー(株)

■ ステークホルダー関係図・役割



Jリーグ地域再生可能エネルギー助成制度:事例

PLANET

気候アクション

●ソーラーシェアリング事業

農地に太陽光パネルを設置し、農作物の栽培と発電を同時に行うことを指す。作物に必要な日照を確保しながら発電することで、農地を有効活用し、農家の収入多様化と地域のエネルギー自給の取り組みとして期待されています。

実施結果 [2025年6月～12月]

発電量 約**4.4**万 kWh
対象農地 約**1,000**m²

水戸ホーリーホック

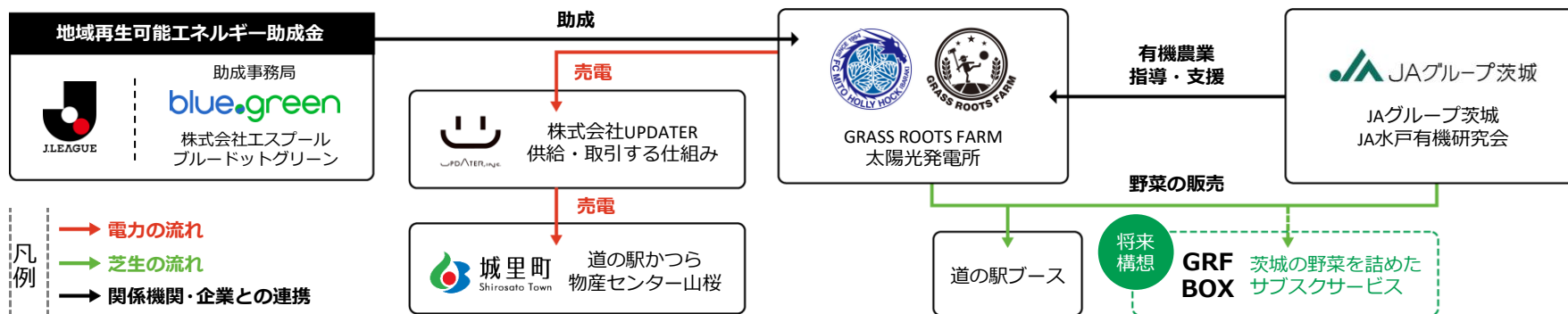
茨城県の耕作放棄地の増加や農業従事者の高齢化という地域課題の解決を背景に、茨城県城里町の耕作放棄地で「ソーラーシェアリング」を中心とした「GXプロジェクト」を2025年6月から開始。発電した電力を地域で活用すると同時に、農産物の生産・販売・体験機会までを行い、電力と農作物の地産地消を一体的に促進。農業収益の多角化、再生可能エネルギーの導入拡大、地域経済の活性化を同時に図るモデルを構築しています。

太陽光発電協会主催2025年度「ソーラーウィーク大賞」大賞
「脱炭素チャレンジカップ2026」環境大臣賞グランプリ受賞



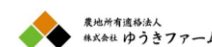
©MITO HOLLYHOCK

■ステークホルダー関係図・役割



サステナアシスト

クラブの取り組みに共感し、ご支援いただくパートナー企業
※2026年4月時点



Jリーグ地域再生可能エネルギー助成制度:事例

PLANET

気候アクション

鹿島アントラーズ

クラブハウスに太陽光パネルと蓄電池を導入し、発電・蓄電・消費を一体化した運用をクラブパートナーであるTGオクトパスエナジー株式会社の協力を得て開始。これによりエネルギーの地産地消を推進するとともに、ホームスタジアムを含む関連施設への再生可能エネルギー供給体制を強化し、地域の脱炭素化と災害時の電力確保に貢献しています。また、発電状況や消費電力を可視化することで、選手・スタッフの省エネルギー意識の向上にもつなげています。

実施結果 [2025年9月～2026年2月]

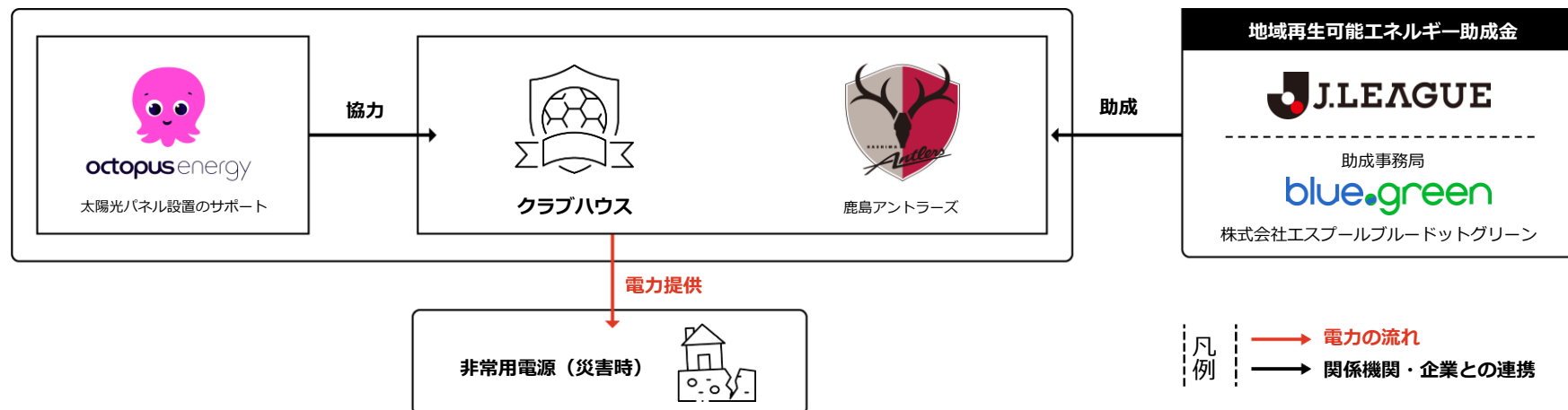
発電量 約 **2.5万 kWh** ※CO2 削減量 約 **10.58t**

*全国平均排出係数を用いて算定（数値は全量自家消費を前提とした数値）



©KASHIMA ANTLERS

■ ステークホルダー関係図・役割



III

3つのテーマの取り組みと 共創事例

① 気候アクション

② インクルーシブな社会へ

③ 地域コミュニティの醸成

気候アクションの基盤づくり

Jリーグの取り組み

Jクラブの取り組み

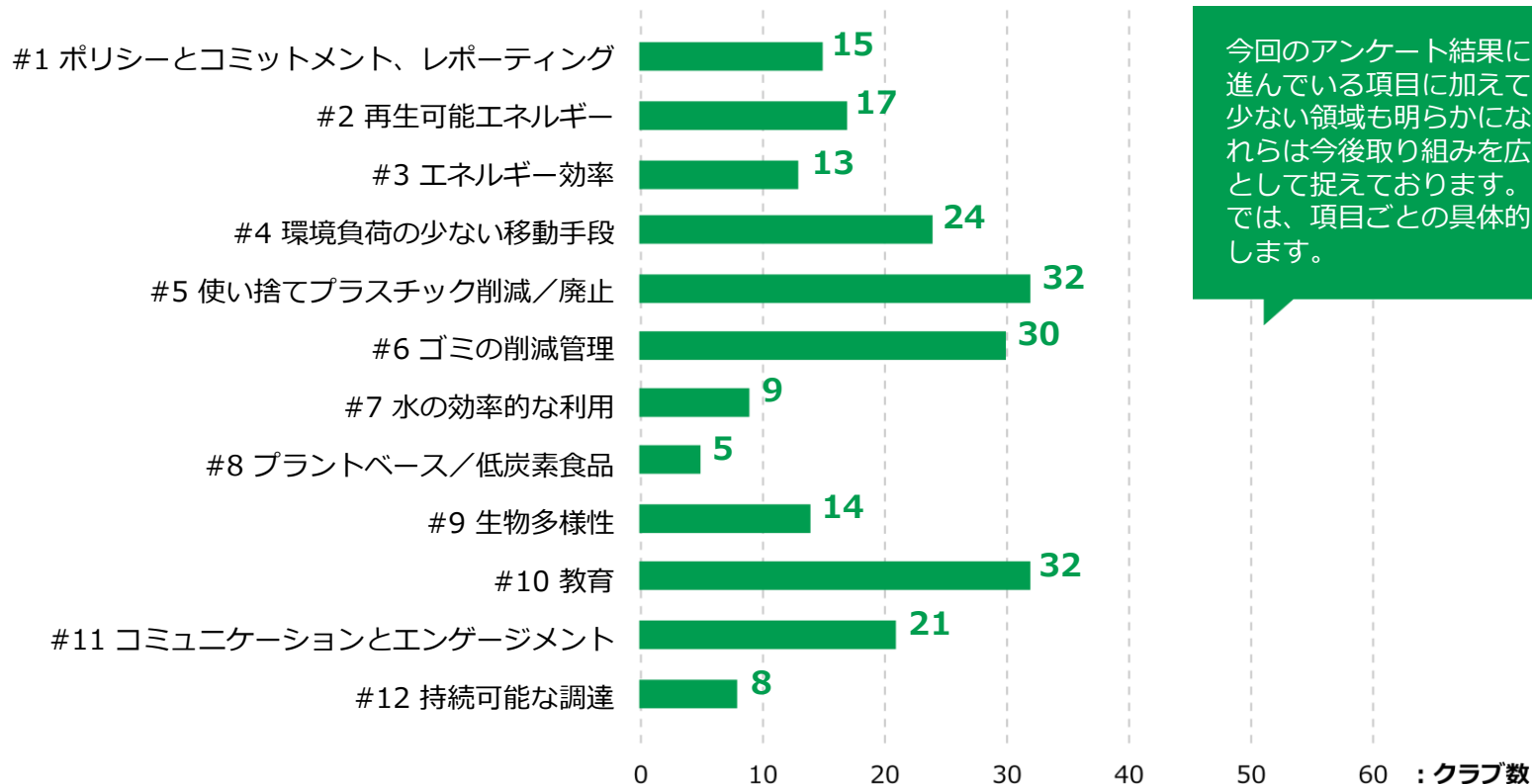
1. JリーグのSPL12領域における取り組み状況

PLANET

気候アクション

ー SPL12領域におけるアンケート調査のサマリ ー

Q. SPL12項目のうち、クラブとして取り組みができていると考えられる項目を選択してください



今回のアンケート結果により、実施が進んでいる項目に加えて、取り組みの少ない領域も明らかになりました。これらは今後取り組みを広げていく余地として捉えております。次のスライドでは、項目ごとの具体的な事例を紹介します。

※2026年1月に全60クラブを対象としたアンケートを実施し、回答のあった51クラブを分析

※2025年は昨年より各項目の定義を明確化し、より実態に即した内容になったことに加え、2024年とは回答クラブ数が異なるため、両年度の比較はおこなっておりません

2. Jクラブの活動事例

PLANET

気候アクション

01

ポリシーとコミットメント、
レポート
F C東京



国連気候変動枠組条約

『Sports for Climate Action Framework』に署名

F C東京は、国連気候変動枠組条約(UNFCCC)の『Sports for Climate Action Framework(スポーツを通じた気候行動枠組み)』にJクラブ初の署名を行い、この国際的な枠組みへの参加を表明。署名団体には、ネットゼロに向けた戦略策定と実行、ステークホルダーとの協働、発信を通じた行動変容の促進、そして気候変動への適応力と連帯の強化が求められます。

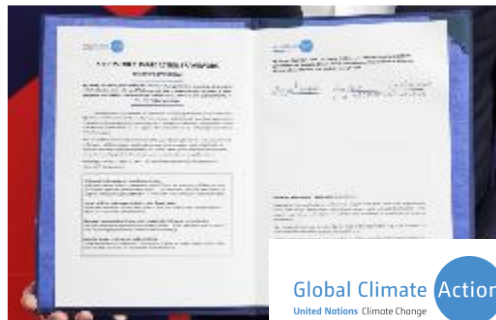
SPL観点
での
Good
ポイント

本条約に署名し、
その国際的な枠組みに則り
クラブ活動を行う予定としている点

※国連気候変動枠組条約 『Sports for Climate Action Framework』とは

本枠組みは、ネットゼロ社会の実現に向けてスポーツ界が一丸となり行動することを目的に、2018年のCOP24（第24回気候変動枠組条約締約国会議）においてUNFCCCとIOC（国際オリンピック委員会）の連携により設立されたもの

詳細：F C東京公式HP



© FC TOKYO

02

再生可能エネルギー
清水エスパルス



清水エスパルス関連全施設にて「静岡県産100%実質再生可能エネルギー電力」導入

クラブの関連する施設で使用している全ての電力を、100%再生可能エネルギー由来の電力（バルちゃんでんきforBiz 協力：鈴木商事株式会社、鈴木電力株式会社）へ切り替えました。静岡県産のトラッキング付非化石証書を付加することで、使用電力の100%実質再生可能エネルギー化および環境価値の地産地消を実現。2025年2月より開始しています。

SPL観点
での
Good
ポイント

クラブの関連全施設に
再生可能エネルギーを
導入している点

以下、関連全施設

IAIスタジアム日本平（照明や大型映像装置など全ての電力）
※2024年4月1日より運用済み、三保クラブハウス、練習グラウンド、育成グラウンド、エスパルスドリームフィールド5 か所（駿東、富士、清水、静岡、藤枝）、選手寮、S-PULSE STORE。これにより、CO2排出量は、2024年比で約416トンが削減される見通しです。

詳細：清水エスパルス公式HP



©S-PULSE

2. Jクラブの活動事例

PLANET

気候アクション

03 エネルギー効率 カタレ富山



クラブの主要活動拠点における省エネルギー診断の実施

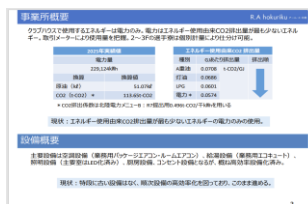
カタレ富山では日本財団より助成を受け、クラブハウスおよびホームゲーム会場を対象に省エネルギー診断を実施し、各拠点におけるエネルギー使用量の現状把握を行いました。診断を通じて、設備面・運用面の両側面から改善の余地を整理するとともに、今後注力すべき省エネルギーの取り組みを明確化しています。

これらの結果を踏まえ、2026年度に向けては、エネルギー効率化計画の策定に向けた検討を進めています。

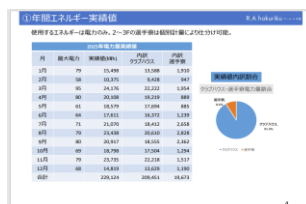
詳細情報：カタレ富山 公式HP

SPL観点
での
Good
ポイント

クラブの関連施設において、
先ずエネルギー効率化計画策定の
ための現状把握を実施している点



©KATALLER TOYAMA



Supported by
日本財団
THE NIPPON
FOUNDATION

04 環境負荷の少ない移動手段 サンフレッチェ広島



選手移動バスで環境にやさしいバイオ燃料を使用

サンフレッチェ広島では日本財団より助成を受け、ホームゲーム開催時の選手移動用バスにて環境に優しいバイオ燃料を使用しています。

バイオ燃料は従来の燃料と同じく焼却時にはCO₂を排出しますが、原料となる植物や藻類の成長過程でCO₂を吸収していることから、CO₂の実質排出量がプラスマイナス0になるカーボンニュートラルな燃料として期待されています。

詳細情報：サンフレッチェ広島 公式HP①

SPL観点
での
Good
ポイント

選手やスタッフの移動に、
環境負荷の少ない移動手段を
導入している点

なお、2024年に開業したまちなかスタジアム「エディオンピースウイング広島」では、来場者の移動に由来するCO₂排出量が、旧本拠地である広島広域公園陸上競技場での試合開催時と比較して、1試合あたり約38%減少したと推計されています。

詳細情報：
サンフレッチェ広島公式HP②



©2025 S.F.C

Supported by
日本財団
THE NIPPON
FOUNDATION

2. Jクラブの活動事例

PLANET

気候アクション

05

使い捨てプラスチック削減・廃止
ベガルタ仙台



ケミ・リサSENDAI

ベガルタ仙台では日本財団より助成を受け、プラ廃棄ゼロの取り組みを仙台、東北から全国に広げべく、日本のプロスポーツイベント初の取り組みとして、スタジアムグルメで使用する容器の完全循環を目標としたケミカルリサイクルプロジェクトを実施。

従来のマテリアルリサイクルでは困難だった食品用途での再利用や品質の維持を可能にするケミカルリサイクルの技術を活用し、スタジアムグルメなどで使用されたプラスチック容器を回収し、ケミカルリサイクルで一度分子レベルにまで分解します。そこから再度プラスチックとして再構成し、食品容器として再利用することで、資源の完全循環を目指します。

詳細情報：ベガルタ仙台 公式HP

SPL観点
での
Good
ポイント

スタジアムにおいて使い捨て
プラスチック削減・廃止のための
体系的な取り組みが行えている点



©1999 VEGALTA

Supported by
日本財団
THE NIPPON
FOUNDATION

06

ゴミの削減管理
セレッソ大阪



バイオコンポスターを用いた 「食品廃棄物の資源循環リサイクル」を開始

サステナビリティパートナーであるヤンマーホールディングス株式会社との取り組みとして、ホームゲーム開催時にスタジアム場外の飲食店「セレッソバル」で発生する食品廃棄物をバイオコンポスターで堆肥化し、長居公園内の体験型農園「長居わくわくファーム」での作物栽培に再利用することで、資源循環の仕組みを構築しています。

詳細情報：セレッソ大阪 公式HP①

なお、ファン・サポーターの親子とクラブアンバサダーと一緒に、生成された堆肥で育てられた野菜の収穫体験も行われています。

詳細情報：セレッソ大阪 公式HP②

SPL観点
での
Good
ポイント

スタジアムで発生する
ごみの焼却率を低減して
いる点、且つファンの
リサイクルへの行動促進
に繋がっている点



©CEREZO OSAKA

セレッソ大阪
CEREZO BAR

YANMAR

NAGAI
PARK



2. Jクラブの活動事例

PLANET

気候アクション

07 水の効率的な利用 F C今治



ピッチ散水や便所などにおける井水・雨水の利用

アシックス里山スタジアムでは雨水・井水を活用する水処理システムを導入しており、トイレの排水や外構緑溝、ピッチの散水に利用するなど、資源の有効活用と浄水の節水に取り組まれています。

また、クラブの関連施設が運営している、スタジアム隣接のしまなみアースランドでは、花の水やりに雨水を使用することで、水利用の効率化に取り組んでいます。

詳細情報：F C今治 クラブ公式HP

SPL観点
での
Good
ポイント

スタジアムに加えて、
他クラブの関連施設においても
水の効率的な利用を推進している点



08 プラントベース/低炭素食品 福島ユナイテッドF C



福島の桃×最新技術で生まれた環境にやさしい桃アイスを配布

福島ユナイテッドFCでは日本財団より助成を受け、日本ハイドロパウテック株式会社が運営する植物性原料アイスクリーム「ANY1 ICE CREAM」と連携し、福島市内で育てられた桃「あかつき」を使ったサステナブルなアイスを開発しました。

同クラブが従来から取り組んでいる地元農作物の魅力を発信する農業部と、NHPの特殊技術による持続可能なモノづくりが出会い、「福島の魅力を・より多くの人に届ける」というミッションを実現させました。

詳細情報：福島ユナイテッドF C 公式HP

SPL観点
での
Good
ポイント

スタジアムで持続可能な方法で
調達されたプラントベース食品を
提供している点



©Fukushima United FC

Supported by
日本財団
THE NIPPON
FOUNDATION

2. Jクラブの活動事例

PLANET

気候アクション

09 生物多様性 清水エスパルス



アイスタSDGsガーデン花植え付けイベント開催

クラブパートナーである静岡県信用農業協同組合連合会と連携し、SUSTAINABLE GARDEN PROJECTの一環として、清水エスパルスホームスタジアムであるIAIスタジアム日本平のメインスタンド側場外の花壇で「SDGsガーデン花植え付け」イベントを開催。宙炭※を用いた植え付けにより、約10a（田んぼ1反）あたりで約1tのCO₂削減効果が期待されています。

詳細情報：清水エスパルス 公式HP

SPL観点
での
Good
ポイント

クラブの関連施設である
スタジアムにおいて、宙炭による
土壌改善・炭素固定＝生態系支援に
つなげている点

※宙炭とは

地域の未利用バイオマスを炭化したバイオ炭に、土壌微生物を定着させた特殊肥料・高機能バイオ炭です。農地に施用することで、短期間で土づくりを行い、微生物性、保水性、水はけを改善し、堆肥や有機質肥料に含まれる窒素成分の利用効率を高めます。



©S-PULSE

10 教育 京都サンガF.C.



未来をつくるエコパスポート学習

京都サンガF.C.では、子どもたちが楽しみながら環境について学べるオリジナル教材「サンガエコパスポート」を制作。このパスポートは、日々の暮らしや学校生活の中に関わる環境問題を、「遠いニュース」ではなく「自分事」として学べる内容です。サッカークラブならではの「サッカー×学び」を掛け合わせ、未来を担う子どもたちが自然環境に興味を持つきっかけづくりを進めています。

詳細情報：京都サンガF.C. 公式HP

SPL観点
での
Good
ポイント

地域の子どもたちに対し、
環境に関して体系的に整理した
教育プログラムを提供している点



©KYOTO.P.S.

2. Jクラブの活動事例

PLANET

気候アクション

11 コミュニケーションと エンゲージメント 鹿島アントラーズ



サステナビリティに関する方針／戦略のクラブ公式HP掲載

「サステナビリティ方針」を策定し、公式HPにて公開。クラブの重要な方針として、メインメニュー内に常時掲示しています。さらに、サステナビリティに関する取り組みは、全体のニュース欄とは別に整理し発信しています。

詳細情報：鹿島アントラーズ [公式HP](#)

SPL観点
での
Good
ポイント

環境含むクラブのサステナビリティに関する方針／戦略がクラブ公式HP上で常に見られる状態になっている点



©1992 K.A.FC

12 持続可能な調達 鹿島アントラーズ



持続可能な調達方針の策定

クラブ運営に関わるすべての物品を対象に「持続可能な調達」方針を策定。新規・既存の取引企業との対話を通じて、サプライチェーン全体で持続可能性を高める取り組みを進めています。

詳細情報：鹿島アントラーズ [公式HP](#)

SPL観点
での
Good
ポイント

クラブ活動において発生するさまざまな調達に関する方針を策定している点



©1992 K.A.FC

III

3つのテーマの取り組みと 共創事例

① 気候アクション

② インクルーシブな社会へ

③ 地域コミュニティの醸成

1. ロードマップ

PEOPLE

インクルーシブな社会へ

短期

中期

長期

目指す状態

理解と共感が深まる

スタジアムで実現したいこと

- ・スタジアムでの応援、クラブのイベントや運営を通じて、多様な人々・多世代（老若男女や障がいのある方、外国人など）の交流が広がっている

地域で実現したいこと

- ・クラブがハブとなり、多様な人々・多世代の交流機会が増え、理解と共感が深まっている

指標

目的別※1の実施クラブ数
目的別の活動開催回数

目指す状態

行動につながる

スタジアムで実現したいこと

- ・交流の広がりによって多様な人々・多世代が関わり、理解し合う機会が増え、共に楽しむ姿勢がスタジアムで定着している

地域で実現したいこと

- ・クラブがハブとなり、多様な人々・多世代が理解し合う機会が増え、周囲を思いやる・助け合う行動をする人が増えている
- ・日々の生活の活力につながり、生きがいを感じる人が増えている

指標

目的別※1の実施クラブ数
目的別の活動開催回数
追加指標を検討中※2

目指す状態

文化が根付く

スタジアムで実現したいこと

- ・多様な人々・多世代が共に楽しめる環境が確立され、支え合う文化が根付いている

地域で実現したいこと

- ・クラブがハブとなり、他社との良好な関係が構築され、思いやりの精神が育まれ、多様性を尊重する文化が広がっている
- ・自己肯定感が向上し、社会で活躍する人が増えている

指標

目的別※1の実施クラブ数
目的別の活動開催回数
追加指標を検討中※2

※1：「障がいのある方」、「外国人」、「子どもの支援」、「高齢者」、「ジェンダー平等」、「さまざまな方が一緒に活動」の大きく6つの目的に、クラブが行っている活動を分類している

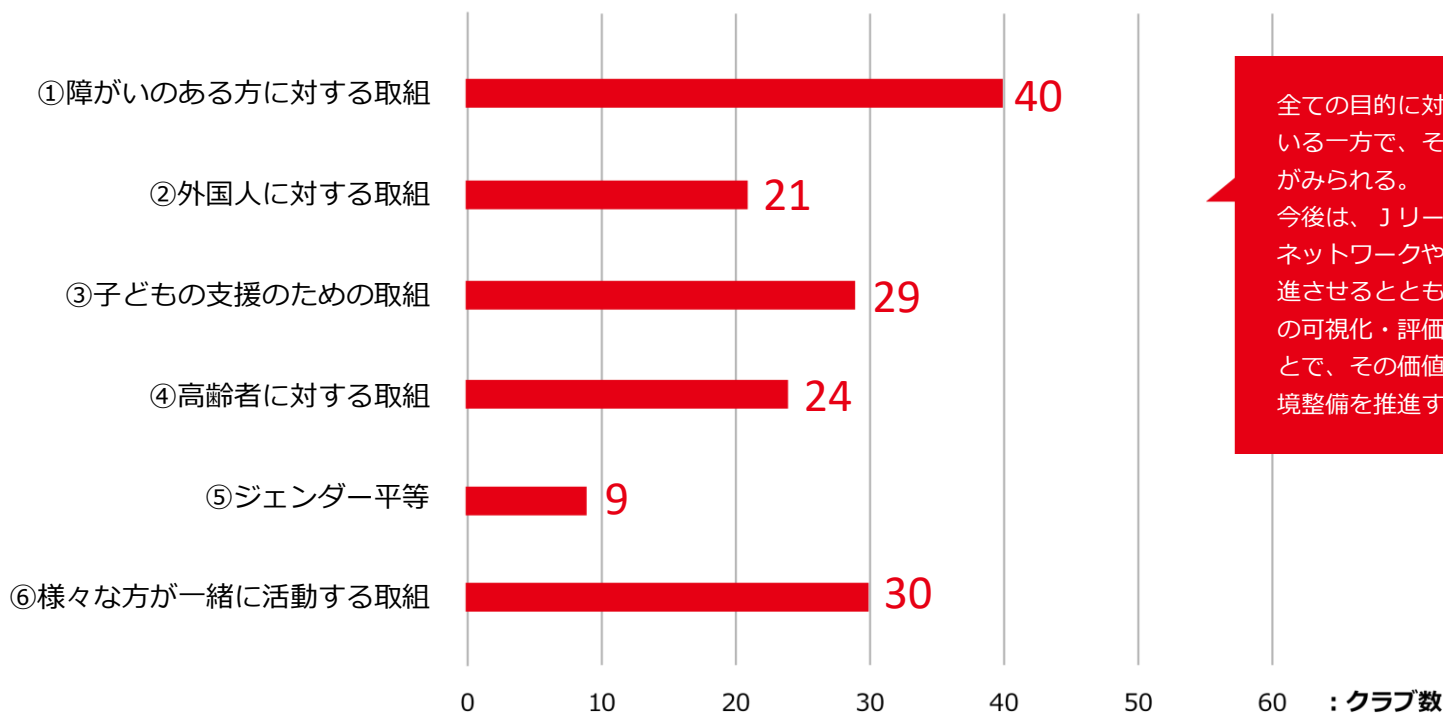
※2：Jリーグとして活動の“質”を評価できるような指標を中期以降で設定すべく検討中

2. 目的別クラブの実施状況

PEOPLE

インクルーシブな社会へ

本テーマにおける目的別クラブの取り組み実施状況



全ての目的に対して取り組みは進んでいる一方で、その取り組み数には偏りがみられる。

今後は、Jリーグ・Jクラブの持つネットワークや強みを生かし活動を推進させるとともに、各取り組みの状況の可視化・評価の仕組みを構築することで、その価値を適切に発信できる環境整備を推進する。

※2026年1月に全60クラブを対象としたアンケートを実施し、回答のあった51クラブを分析

※2025シーズンでは各目的の定義の明確化したことに加え、回答クラブ数が異なるため昨年との単純比較はできないが、より実態に即した数値となっている。

項目内容の一部補足説明

③経済的・社会的に困難を抱える子どもやひとり親家庭など、支援を必要とする子どもに対する取り組みであること

⑤LGBTQ+など含む。女性を対象としたものについては、多様な背景や役割を持ちながらも等しく参加できたり、支えられ、学びが得られるような機会を提供する取り組みであること

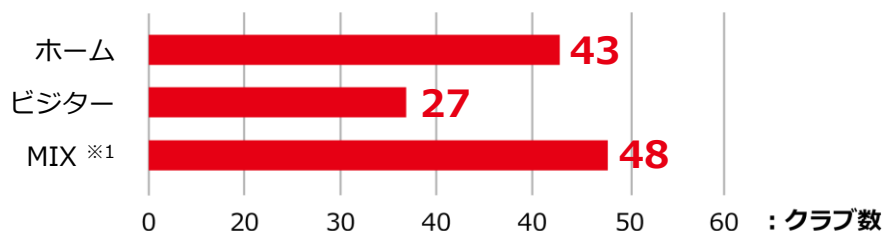
3. 多様な観戦方法

PEOPLE

インクルーシブな社会へ

■ エリア別車椅子席の提供クラブ数

集計対象：J1～J3の全60クラブ



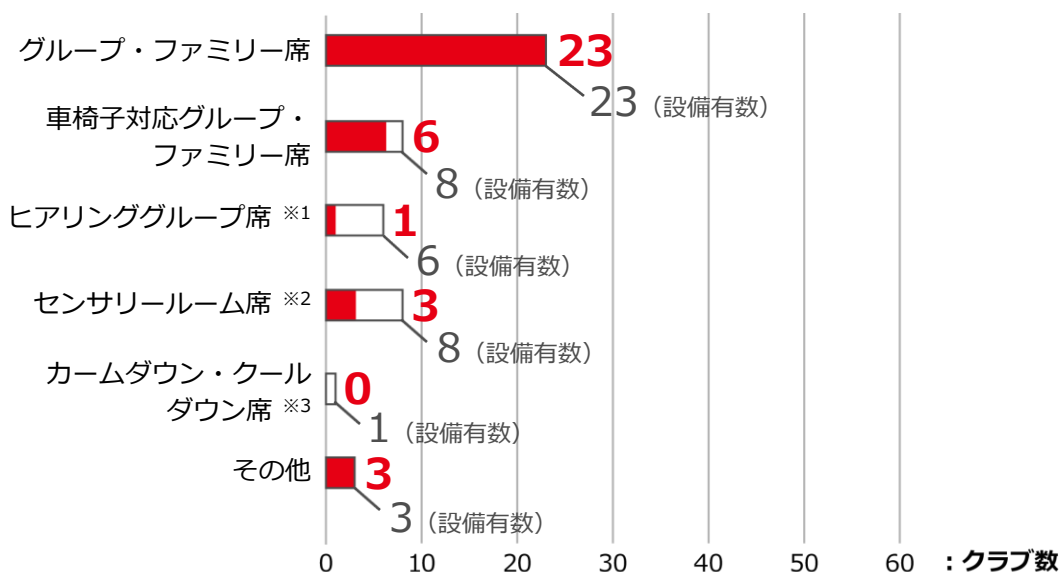
※1：MIX席とはホーム・ビジターの区分なく同一エリアで観戦可能な車椅子席

Jリーグでは全60クラブのスタジアムにおいて車椅子席が提供されている。

- ・車椅子利用者がホーム・ビジターを問わず試合観戦できる環境の実現に向け、各クラブで車椅子席の整備・運用に取り組んでいる。（詳細は左記グラフ参照）
- ・また、観戦時の環境整備の一貫として介添え人に加え同伴者を含めた受け入れ体制の整備などの取り組みも進められている。

■ 多様な観戦席の設置クラブ数（試合での利用が可能な数）

集計対象：J1～J3の全60クラブ



※1：座席下のヒアリンググループ（アンテナ線）により、雑音に邪魔されずに音を補聴器や人工内耳に届けることが可能な座席

※2：さまざまな人がリラックスした姿勢で、かつ、感覚過敏の方でも安心して観戦できる部屋

※3：発達障がいや自閉症の方が感情が高ぶるなどパニックになった際に周りから独立して気持ちを落ち着けることが可能な部屋

多様な観戦席に係るクラブの対応状況

- ・一部のクラブでは多様な観戦者に対応して受け入れ体制の整備が進んでいる一方で、全体としては設置状況や対応内容に差異が見られる。

Jクラブは、スタジアム所有者ではなく設備変更に関する権限を持たないケースが多い中で、座席運用や観戦サポートの工夫を重ね観戦環境の向上に取り組んでいる。

今後はこうした取り組みを継続・発展させるとともに、関係者と連携しながら、誰もが試合観戦できる環境の充実にに向けて働きかけていく。

3. 多様な観戦方法:事例

PEOPLE

インクルーシブな社会へ

● MUFGスタジアム（国立競技場）における 車椅子席リーグ統一運用ガイドラインの試験運用を開始

建築物のバリアフリー基準や「高齢者、障がい者などの円滑な移動などに配慮した設計標準」の改正を受け、MUFGスタジアムにて開催するJリーグ公式試合を対象に、車椅子席エリアの運用を共通化。

2025年11月のテスト運用での成果を踏まえ、2026特別シーズンより統一運用ガイドライン（暫定版）に基づく運用を開始しました。

実施インパクト



車椅子席利用者数
(発券枚数)

200人以上



介添・同伴者2名以上で
利用した人の満足度※

83%

※ 下記対象試合での車椅子席利用者を対象にアンケートを実施し、5段階評価で上位2段階の回答をした人の割合から算出（有効回答数13）

※ テスト運用対象試合

2025 JリーグYBCルヴァンカップ決勝（柏レイソル対サンフレッチェ広島）

2025明治安田 J1リーグ第36節（町田ゼルビア対FC東京）

車椅子席リーグ統一運用ガイドラインの詳細はこちら [🔗](#)

同ガイドラインでは、**ゴール裏を含めた全エリアでの車椅子席販売や、介添や同伴者として2名以上が同じエリア内で観戦できる環境の整備**などを示しています。

今後も車椅子席の運用実態調査や利用者・運営関係者へのアンケートなどを通じて運用改善を進めていきます。

● 車椅子席利用者からの感想

これまでは介添・同伴者が1名のみケースが多く、家族は別の席で観戦しなければならなかった。試合終了後の混雑の中、会場で落ち合うのも大変だった。今回は5人のグループで一緒に応援することができ楽しかった



4. Jリーグとパートナー企業の活動事例

PEOPLE

インクルーシブな社会へ

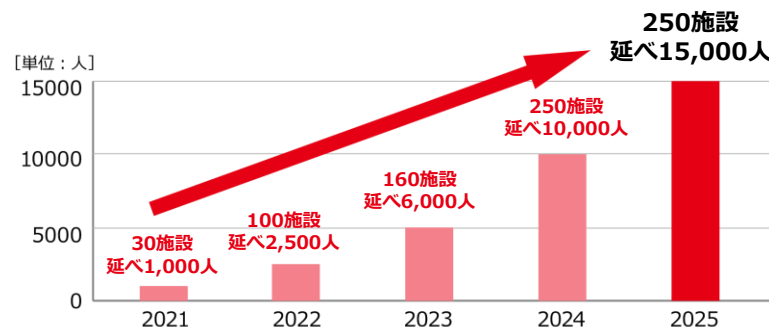
● Be supporters !

高齢者施設で過ごす高齢者や認知症の方など、普段は周囲に「支えられる」機会の多い方が、サッカークラブの「サポーター」になることで、クラブや地域を「支える」存在になっていくことを目指すプロジェクト。「支えられる人から支える人へ」をコンセプトとして、2020年12月にサントリーウエルネス株式会社が4つのJクラブと協働してスタートし、2021年12月にはJリーグとパートナー契約を締結し、全国で活動推進。「いくつになってもワクワクしたい、すべての人へ。」という言葉の下に、その輪が広がり続けています。

実施結果

連携したエリア、施設の数及び参加人数

全国 **29** エリア 約 **250** 施設 約 **1.5** 万人以上



| ステークホルダー関係図・役割



人生100年時代の物語大賞

Be supporters! で生まれた「人生100年時代の幸せな生き方」を体現する多様な物語を表彰

あきらめない91歳、転んでも立ち上がるヨシコさんの物語

体を思うように動かせなかったヨシコさんが、レノファ山口FCの応援をきっかけに松田選手と出会い、「スタジアムで応援する」という目標を持ち懸命なリハビリの末に観戦の夢を実現させた。
一人のスタッフの思いから始まった活動は、松田選手との絆を生み、ヨシコさんに大きな活力を与えた。目標に挑み続ける姿は、支援者の希望と原動力となっている。



応援の魔法がもたらした、介護現場での驚きの変化

4年ぶりに外の世界へ～植竹さんが教えてくれたこと～

人生100年時代の物語大賞の受賞作品全文はこちら



5. Jクラブの活動事例

PEOPLE

インクルーシブな社会へ

障がいのある方に対する取り組み

東京ヴェルディ

障がい者スポーツ事業立ち上げ講習

年間を通して開催する各種障がい者スポーツ普及活動（2025年度実績388回）で培ったノウハウをベースに、他団体の指導者育成や事業の立ち上げを支援する講習を実施



©TOKYO VERDY



浦和レッズ

障がい者アート展 2025 「LIVE TOGETHER！」

障がい者アーティストによる浦和レッズをテーマにした作品などをホームゲーム全試合でコンコースに展示し、創作を通じて『自分らしく生きている』姿を発信、『自分らしく働ける』場の提供



©URAWA REDS



いわき F C

DLT・DSA設置によるスタジアムにおける障がいをなくす取り組み

障がいを持つファン・サポーターの相談窓口として DLT(Disability Liaison Team)を設置。障がいのあるサポーター団体(DSA)をはじめとした障がい当事者と意見交換を行い観戦環境を改善する取り組みを開始



©IWAKI FC



RB大宮アルディージャ

手話応援デー

ホームゲームで手話を活用した応援を実施。また、手話応援練習ブースや手話体験コーナーを通して、障がいのある人も、ない人も一緒にスポーツを楽しむ姿を発信



©2024 RB OMIYA Inc.



5. Jクラブの活動事例

PEOPLE

インクルーシブな社会へ

外国人に対する取り組み

川崎フロンターレ

ベトナム児童養護施設・ 小児病棟 支援プロジェクト



選手らが提供する品にてチャリティーオークションを実施。その支援金でサッカーシューズ・文具セットなどのグッズを購入し、ベトナムの児童養護施設や小児病棟の子どもたちへ届けることで支援



©KAWASAKI FRONTALE

清水エスパルス

スタジアムボランティア向けやさしい日本語講座



誰もが安全に楽しめるスタジアムサービスを目指し、スタジアムボランティアを対象に、外国人にも伝わりやすい言葉や話し方をレクチャー



©S-PULSE

レノファ山口FC

スポーツで地域と世界がつながるスポーツ交流 プログラム



台湾のサッカーアカデミーの選手・指導者を山口県に迎え、レノファ山口FCのアカデミー生と合同トレーニングを実施。また、行政、パートナー企業との文化体験、職業体験などを通じて新たなつながりを実現



©RENOFA YAMAGUCHI FC

栃木シティ

CITY WORLD FESTIVAL



ジュニア年代から国際交流を通じて国際的な視野を育成することを目的とし、U-11年代を対象とした国際大会をCFSにて開催。国内外のチーム同士の交流を実現



©TOCHIGI CITY

5. Jクラブの活動事例

PEOPLE

インクルーシブな社会へ

子どもの支援のための取り組み

FC東京

多摩少年院の在院者とトートバッグをデザイン・製作協力

多摩少年院の少年たちの社会復帰を支援すべく、少年たちとともにトートバッグを企画・製作し、ホームゲームにて販売



© FC TOKYO



FC琉球

離島の子もたち招待

子どもの「体験格差」を是正すべく、ホームゲームに8つの離島から計60名を招待。試合後にはスタジアムで花火が打ち上げられるなど、離島の子もたちにFC琉球ならではの体験を提供した



©FC RYUKYU



カタレ富山

誕生日寄付

支援の手が届きにくいグレーゾーンの児童のために活動する富山県内の団体への寄付を募集。一年に一度、自身や大好きな選手の誕生日に寄付をすることで、子どもたちの未来を応援する取り組み



©KATALLER TOYAMA



柏レイソル

スタディドライブ

ホームゲーム開催日に合わせ、家庭で眠っている文房具の寄付を呼びかけ、文房具を必要としている子どもたちに届ける取り組み



©KASHIWA REYSOL



5. Jクラブの活動事例

PEOPLE

インクルーシブな社会へ

■ 高齢者に対する取り組み

ロアッソ熊本

ロアッソウェルネスプログラム



高齢者介護予防事業として3か月間にわたって実施される健康づくりプログラム。市内10か所以上で開催され、市民の健康維持を促進している



©AC KUMAMOTO

モンテディオ山形

O-60コミュニティ



高齢者の健康増進と新たなつながりの創出を目的に、山形県内の60歳以上を対象としたコミュニティを発足。ホームゲームに合わせてイベントを実施し、誰かとともに熱くなれる体験を生み出している



北海道コンサドーレ札幌

コンサドーレズ『月下美人』



60歳以上を対象としたシニアチアリーディングスクール。ホームゲームでは観客を前にパフォーマンスを実施するなど、地域を盛り上げる存在となっている



アビスパ福岡

高齢者の“推し活”プロジェクト



高齢者施設の入居者を対象に、アビスパ福岡の選手に向けた推し活を実施。推しの選手を応援する楽しさが新たな日常の楽しみとなり、認知症予防や進行抑止につながると期待されている



©avispa fukuoka

5. Jクラブの活動事例

PEOPLE

インクルーシブな社会へ

ジェンダー平等に対する取り組み

ガンバ大阪

ガールズサッカークリニック

女子サッカーの普及やプレー機会の創出を目的に、小学生の女の子を対象としたサッカークリニックを開催。女子サッカーのすそ野を広げる活動を推進している



©GAMBA OSAKA



福島ユナイテッドFC

PRIDE指標ゴールドの取得

職場におけるLGBTQ+など性的マイノリティへの取り組みの評価指標である「PRIDE指標」の最高評価である「ゴールド」をJリーグクラブ単体では初めて受賞



©Fukushima United FC



5. Jクラブの活動事例

PEOPLE

インクルーシブな社会へ

さまざまな方が一緒に活動する取り組み

ファジアーノ岡山

インクルーシブフェスタ

障がいのある方、ない方、年齢や性別などにかかわらず、全ての方がともに楽しみ、体を動かすイベントを開催。多様な人々がアンブレティサッカーやブラインドサッカー、ボッチャなどを体験した



©FAGIANO OKAYAMA



愛媛F.C

インクルーシブサッカークリニック

地域社会との絆を深める取り組みとして、全ての方がサッカーを通じて楽しみ、交流を深められるインクルーシブサッカークリニックを開催



ヴィッセル神戸

ノエスタラジオ体操

地域の健康促進を目的に、夏休み期間中にスタジアムでラジオ体操を実施。地域のさまざまな人が集い、世代を超えた交流を生んでいる



©VISSEL KOBE



大分トリニータ

ユニバーサル（パラ）スポーツ体験

全ホームゲームにてユニバーサルスポーツ体験コーナーを実施。障がいのあるなしに関わらず、一緒にスポーツを楽しめる機会を創出している



©OITA F.C.



III

3つのテーマの取り組みと 共創事例

① 気候アクション

② インクルーシブな社会へ

③ 地域コミュニティの醸成

1. ロードマップ

COMMUNITY

地域コミュニティの情勢

短期

中期

長期

目指す状態

関心が深まる

- スタジアムやクラブの関連施設、地域におけるクラブをハブとした活動を通じてコミュニケーションを取る機会が増え、お互いの関心が高まっている
- 地域住民同士の協力関係が育まれ、地域を支える意識が広がっている

指標

ホームタウン活動の実施回数

目指す状態

活動が活発になる

- スタジアムやクラブの関連施設、地域におけるクラブをハブとした活動を通じて
- ファン・サポーター同士が声を掛け合うようになることで地域社会のつながりが深まっている
- 地域課題の解決や、地域社会の発展に積極的に取り組む人々が増え、コミュニティ活動が活発になっている

指標

ホームタウン活動の実施回数
追加指標を検討中※1

目指す状態

日常的に支え合う

- スタジアムやクラブの関連施設が地域住民の交流の場として定着し、そこで生まれたコミュニティが地域社会に欠かせない存在になっている
- 地域の人々の相互理解が深まり、楽しみながら人とつながり続けている人が増え、地域への愛着や誇りがあふれている

指標

ホームタウン活動の実施回数
追加指標を検討中※1

※1：Jリーグとして活動の“質”を評価できるような指標を中期以降で設定すべく検討中

2. Jリーグとパートナー企業の活動事例

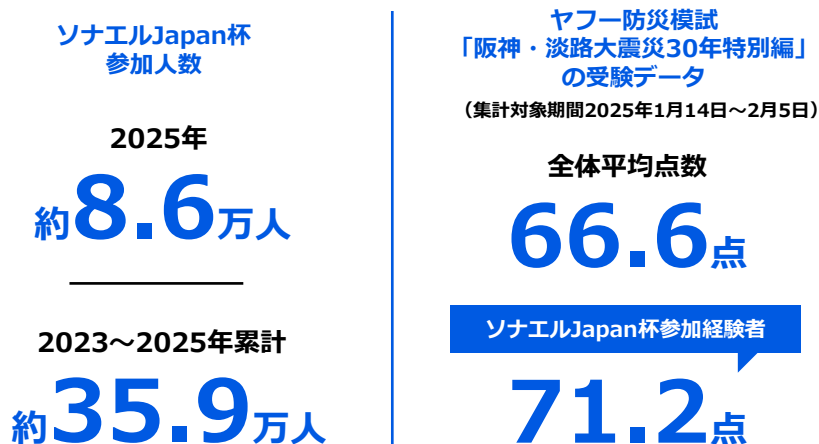
COMMUNITY

地域コミュニティの情勢

●ソナエルJapan杯

防災意識を高めることを目的に、LINEヤフー社が提供する「ヤフー防災模試」（速習編など計5編）をJリーグ、Jクラブのファン・サポーターがスマートフォンなどで受験し、「勝点」をクラブ間で競い合う取り組みを2021年に開始。「勝点」は受験成績やクラブのSNS投稿へのリアクション数に基づき付与。災害時に生き抜く知識やスキルを学びながらクラブを応援し、災害に強い地域を増やしていく。2025年の新しい取り組みとして、地域の行政や企業と連携して、スタジアムでの防災訓練やVR体験など、動きながら、体験しながら学ぶ「動いてソナエル」を実施。試合日に遊びながら学べるコンテンツとして、延べ21クラブで開催された。

実施インパクト



全体の受験平均点数比べた場合、ソナエルJapan杯参加者の平均点は、最大で5点以上高いスコアを出していた。応援するクラブの勝点につなげるために、複数回受験をすることで知識が定着する参加者が増えた。

| ステークホルダー関係図・役割



「イオンの防災“いざ活”」 コラボキャンペーン概要



Jリーグトップパートナーであるイオンが実施する防災の取り組み「イオンの防災“いざ活”」とコラボレーション。日常の買い物を通じて防災意識向上を促すことを目的として、イオン店舗で一定額以上を購入し、さらに「ソナエルJapan杯2025」に参加した方を対象として、Jリーグ防災セットが抽選で当たるキャンペーンを実施。

2. Jリーグとパートナー企業の活動事例

COMMUNITY

地域コミュニティの情勢

●シャレン！で献血

若い世代の献血が減少傾向である社会課題を踏まえ、日本赤十字社協力の下、Jリーグ全クラブと共に献血の啓発活動を行う「シャレン！で献血」を2023年より全国で展開。明治安田の従業員による地域の皆さまへの献血ルームの案内活動や、Jリーグのファン・サポーターやスタジアム来場者に向けた試合当日の献血バスのスタジアム誘致活動などを通じて、定期的な献血を促進する。

実施インパクト

シャレン！で献血

献血協力者数

2025年

約**2.2**万人

2023～2025年累計

約**4.7**万人スタジアムでの献血案内活動に
協力したJリーグ選手OB

2025年

117人

2023～2025年累計

234人

| ステークホルダー関係図・役割



3. Jクラブの活動事例

COMMUNITY

地域コミュニティの情勢

■ 防災・震災復興

ツエーゲン金沢

ONE HEART 石川



令和6年の能登半島地震・奥能登豪雨の被災地支援のため、行政や企業と連携し、被災地でのイベントや整地作業などの現地訪問を踏まえた復興支援活動を年間通じて実施



©ZWEIGEN KANAZAWA

キラヴァンツ北九州

あそぼうさいの実施



遊ぼう！と防災！を掛け合わせた、『あそぼうさい』を開催し、ホームゲームで子どもから大人まで楽しみながら防災を学べる体験型プログラム



©GVK2009

ヴィッセル神戸

レッスンバッグ配布プロジェクト



阪神・淡路大震災を経験したクラブとして、神戸市内の小学新1年生に防災頭巾として活用可能なレッスンバッグを配布と防災講話を実施



©VISSSEL KOBE

藤枝MYFC

ふじのくにジュニア防災士養成講座



南海トラフ地震リスクに備え、地域防災の担い手育成を目的に子どもたちを対象に防災の基礎知識を学ぶ講座を実施



©2025 FUJIEDA MYFC

3. Jクラブの活動事例

COMMUNITY

地域コミュニティの情勢

教育

SC相模原

SC相模原みらい塾



地域の中高校生を対象に、将来、地元企業の進化や成長を牽引する存在となるべく、論理的かつ自律的な思考を養う4日間のワークショッププログラム



©S.C.SAGAMIHARA

ヴァンフォーレ甲府

「ヴァンフォーレ読書のチカラ」



山梨県内の読書離れの課題に対し学校やパートナー企業と連携し、選手とともに「空想書店」を考える体験型授業を通じて、自分の興味から読書につながるきっかけをつくる取り組み



©VFK

湘南ベルマーレ

サステナトレセンProject. ※1



地域のSDGs／サステナビリティを推進する企業・行政と連携し、小学校の探究学習の授業の中で、「世界はたのしく変えられる」を合言葉に地域の次世代のサステナビリティ人材を育成する教育プログラム

※1「サステナトレセンProject.」は株式会社shikakeruの商標です



©SHONAN BELLMARE

FC琉球

スタジアムスクールDAY



県内小中学校と連携し生徒をスタジアムに招待し、試合観戦に加え職業体験を通じて沖縄県ゆかりの企業の取り組みや職業について理解を深める学びの機会を提供



©FC RYUKYU

3. Jクラブの活動事例

COMMUNITY

地域コミュニティの情勢

健康

徳島ヴォルティス

ヴォルティスコンディショニングプログラム



専門コーチによる運動指導やコンディショニング支援を通じて、地域住民の運動機能の改善や運動習慣の定着を目的としたプログラムを実施



©T.VORTIS

いわきFC

いわきスポーツアスレチックアカデミー (ISAA)



スポーツに関わることの楽しさを創造し、子どもの体力・運動能力向上とスポーツ万能型人材の育成を目的に、走る・投げる・跳ぶ・掴むなどの基礎運動を遊びながら学ぶプログラムを提供



©IWAKI FC

ファジアーノ岡山

「にじいろキャラバン」



子どもたちがスポーツを通じて身体の成長や仲間づくりの大切さを学び、豊かな心の成長・発達に寄与することを目的として、専属コーチを小学校へ派遣し、子どもたちが主体的に学ぶ運動プログラムを実施



©FAGIANO OKAYAMA

モンテディオ山形

0-60プログラム



山形県内の60歳以上を対象に、運動や交流を通じて健康づくりと仲間づくりを支援するシニア向けコミュニティ活動





ホームタウン活動調査

ホームタウン活動調査

Jクラブは、毎年多くの、多岐にわたる目的でホームタウン活動に取り組んでおり、地域の発展や課題解決において欠かせない存在となっている

集計対象：J1～J3の全60クラブ

ホームタウン活動
年間実施回数
32,806回

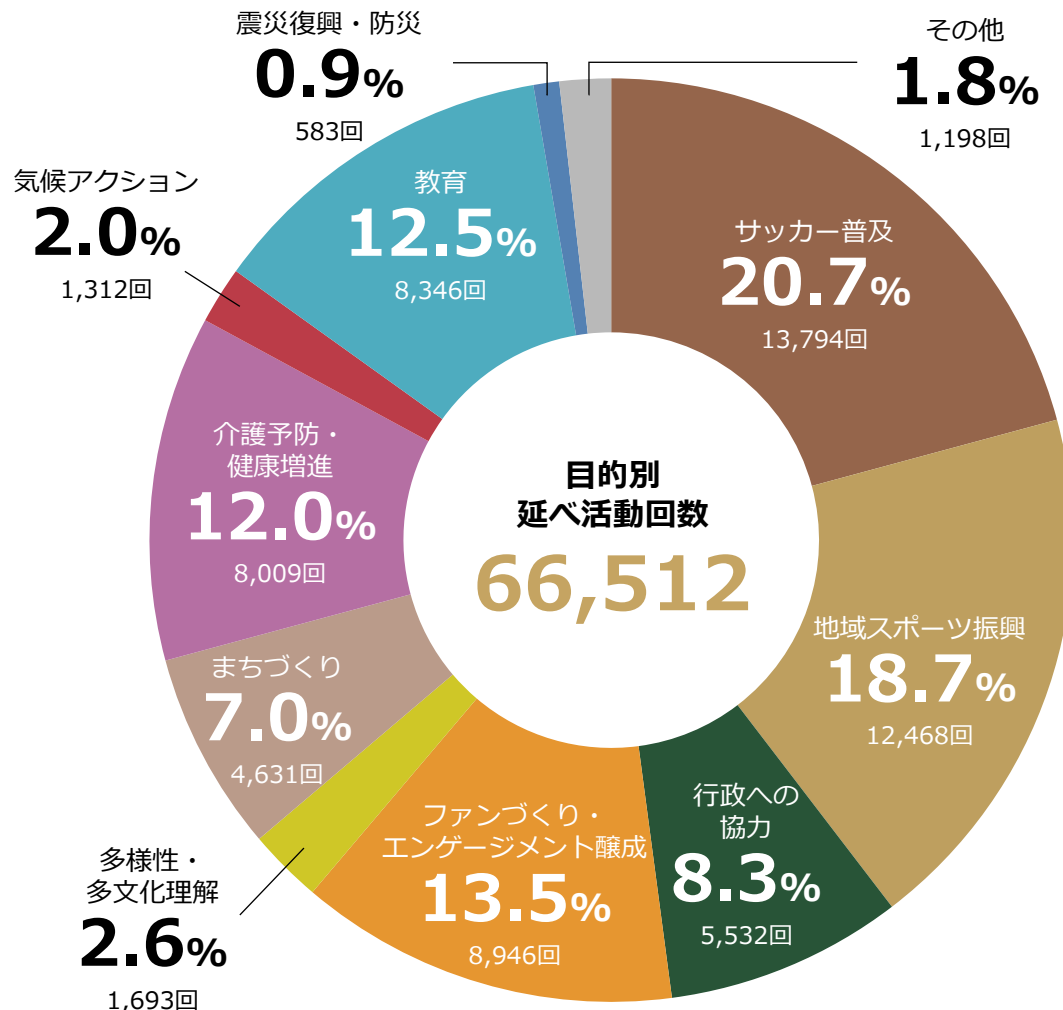
うちシャレン！活動回数

4,109回

※3者以上で共通の社会課題へ取り組む手法

活動目的の構成

※各クラブが実施したホームタウン活動を、クラブからの報告に基づいて集計
※「活動目的」は1つの活動につき複数選択となるため、延べ活動回数を表示



A man in a white t-shirt and dark overalls stands smiling next to a large wooden sign. The sign features the text "GRASS ROOTS FARM" and "SOLAR POWER PLANT" with two circular logos. To the left, a smaller sign lists "GX Partners" with logos for "TERRA" and "JA". The background shows a large wooden frame structure, likely for solar panels, under a clear sky.

2026リーグ シャレン!アウォーズ受賞活動

2026 Jリーグシャレン！アウォーズ 受賞活動

Jクラブが協働者とともに社会課題・地域課題の解決に挑むシャレン！活動を通じて、人と人、地域とクラブをつなぎ、スポーツの価値を最大限に発揮しながら持続可能な地域社会の実現を推進している。

鹿児島ユナイテッドFC

ソーシャルチャレンジャー賞

その地域にある社会課題解決に対してチャレンジしている活動



無人駅を復活させる！「ゆなべす喜入」の挑戦

2020年に無人駅となった喜入駅で、地域の活性化を目的に旧駅事務室を改修し、飲食提供やイベントを実施するなど、地域交流・にぎわい創出の拠点を形成



©KAGOSHIMA UNITED FC

レノファ山口FC

メディア賞

記者として、自身の媒体に取り上げたいと思う活動



Jリーグクラブが導く「地域探究」の新機軸！ パートナー共創で山口の未来をデザインする 探究型修学旅行プロデュース

自治体及びパートナー企業などと連携し、山口県全域の地域課題や魅力をテーマとした探求学習を組み込んだ修学旅行プログラムを企画・実施



©RENOFA YAMAGUCHI FC

2026 Jリーグシャレン！アウォーズ 受賞活動

Jクラブが協働者とともに社会課題・地域課題の解決に挑むシャレン！活動を通じて、人と人、地域とクラブをつなぎ、スポーツの価値を最大限に発揮しながら持続可能な地域社会の実現を推進している。

ヴァンフォーレ甲府

パブリック賞

国や自治体が掲げる政策を活用し、地域の課題解決に向けて、多様なステークホルダーと連携し、持続可能な活動となるように取り組んでいる活動

声に耳を澄ませて一クラブが歩んだ20年と、 パラスポーツセンターへの挑戦

障がい者スポーツ・福祉分野における地域連携の実績を基に、パラスポーツセンターの運営に参画し、障がい者の有無に関わらずスポーツに参加できる環境を整備するとともに、利用機会を提供



©VFK

横浜FC

明治安田 地元の元気賞

地域社会とのつながりの創出をテーマにした活動であり、地域住民を元気にした取り組み

4年ぶりの外の世界～医療・施設・クラブで 紡ぐ幸福寿命～

医療機関や福祉施設と連携し、外出機会の限られる患者を対象としたスタジアム観戦機会の提供を行うとともに、観戦に必要な移動および受け入れ体制を整備



©YOKOHAMA FC

2026 Jリーグシャレン！アウォーズ 受賞活動

Jクラブが協働者とともに社会課題・地域課題の解決に挑むシャレン！活動を通じて、人と人、地域とクラブをつなぎ、スポーツの価値を最大限に発揮しながら持続可能な地域社会の実現を推進している。

水戸ホーリーホック

クラブ選考賞

各Jクラブが、自クラブ、自地域でも実施したいと思える活動



ソーラーシェアリングを活用したGxプロジェクト

ソーラーシェアリング（営農型太陽光発電）を導入し、耕作放棄地の活用や再生可能エネルギーの創出と農業生産を両立させることで、地域資源を活かした持続可能な循環型モデルの構築



©MITO HOLLYHOCK

V・ファーレン長崎

ファン・サポーター選考

自身が応援しているクラブの地域でも実施してほしいと思える活動



「ALL NAGASAKI」

～魅せたぞ、長崎のチカラを～

ファン・サポーター、企業、行政、交通機関、商店街などと連携し、県内全域で応援施策やパブリックビューイング、街中演出を展開することでスタジアムの熱狂を日常へ波及させ、地域一帯の機運醸成とにぎわいを創出



©vvv

Progress Over Perfection

日ごろからJリーグのサステナビリティ活動を支えて下さり、本当にありがとうございます。皆さまのお力添えもあり、2025シーズンは、ロードマップに基づいて、さまざまな構想を具体的な行動へ落とし込み、さらには、より持続可能な社会へのシステムチェンジに貢献するための一歩を踏み出すことが出来た一年でした。

日本財団とサステナビリティ領域における連携協定を締結する一方、Jリーグと各クラブは「気候アクション（PLANET）」「インクルーシブな社会へ（PEOPLE）」「地域コミュニティの醸成（COMMUNITY）」という3つのテーマを軸に方向性を共有し、さまざまな課題の解決に向けた取り組みを着実に進めてきました。

「気候アクション」においては、各クラブによる施策実践を後押しするための制度整備や環境づくりに多くのリソースを割きました。例えば、各クラブに対する再生可能エネルギー助成金やナレッジトランスファーなどの導入支援、各クラブ主催のカンファレンス等への協力など、経済面だけに止まらない多岐に渡る支援を行っています。また、各クラブの気候アクションに関する取り組みを12の共通指標で評価する国際的イニシアチブ「Sport Positive Leagues」に参画し、好事例を共有しながら、リーグ全体で歩みを進めるための土台を築きました。

「インクルーシブな社会へ」では、誰もが安全にサッカーを楽しめる環境を作るための取り組みを推進しました。MUFG スタジアムにおける車椅子席リーグ統一運用ガイドラインの制定は、その象徴的な取り組みの一つです。多くの試合で、介添人だけでなく、ご家族やご友人など、複数で試合を楽しんでいただく姿が見受けられました。

「地域コミュニティの醸成」という地域社会の基盤づくりとも言える分野では、Jリーグ、各クラブ、パートナー企業、自治体、非営利団体、各種施設等と連携し、地域の人々がつながり、支え合う姿を実現するための取り組みを継続的にを行っています。

わたしたちがサッカーを楽しむことができる社会と自然環境を次世代につないでいくためには、どんなに小さくても具体的な行動に移すことが大切だと考えています。まだまだやるべきことは山積みですし、改善の余地がある活動もたくさんあるのが正直なところです。自分たちの現在地をしっかりと認識しつつ、Progress Over Perfection（完璧さよりも前進を）の精神で足を前に進めながら反省と学びを繰り返し、活動の量と質を向上させていきたいと考えています。引き続き、Jリーグのサステナビリティ活動へのご理解をお願いするとともに、さまざまな取り組みやプロジェクトを通じて、ともに歩みを進めていただけたら幸いです。



Jリーグと共にサステナビリティを推進するパートナー各社



PLANET

気候アクション



TH!NK THE BALL PROJECT

デジタル技術による気候アクション参加の推進

明治安田

明治安田×Jリーグの森 ～未来をつむぐ森～

デジタル技術による気候アクション参加の推進



JNE 日本自然エネルギー株式会社

FIT非化石証書・グリーン電力証書の提供

全公式試合電力由来のCO2排出実質ゼロ



地域再生可能エネルギー推進助成制度

「気候変動問題の解決」と「地域活性化」



温室効果ガス排出量算定・

気候アクションの可視化

気候アクション推進と脱炭素行動の促進



カーボンオフセット付PCおよび

PCのリユースサービス

環境負荷の可視化・低減



東急不動産

Jリーグ環境教育授業

環境教育による次世代育成



PEOPLE

インクルーシブな社会へ



Be Supporters !

シニアのサポーター活動によるウェルビーイング促進



COMMUNITY

地域コミュニティの醸成

明治安田

シャレン！で献血

献血活動による地域貢献

LINEヤフー

ソナエルJapan杯

地域の人々の防災意識の向上

Jリーグは、2023年度より新たなパートナーカテゴリーとして、気候アクションに特化した「Jリーグ気候アクションパートナー」を新設しており、上記企業はそのパートナー各社



J.LEAGUE IMPACT REPORT 2025

Jリーグ
インパクトレポート2025



サステナビリティ活動に関する報告書

発行日	2026年5月
発行人	野々村芳和
発行所	公益社団法人日本プロサッカーリーグ（Jリーグ） 〒100-0005東京都千代田区丸の内2-1-1 明治安田生命ビル8F https://www.jleague.jp/
写真	Jリーグ
制作・編集	公益社団法人日本プロサッカーリーグ
制作協力	KPMGコンサルティング株式会社 合同会社マトイクリエイティブ

本書の無断複写複製（コピー）は、特定の場合を除き、著作権の侵害となります。

J.LEAGUE IMPACT REPORT 2025

本レポートの制作は、日本財団の助成を受けています

